ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

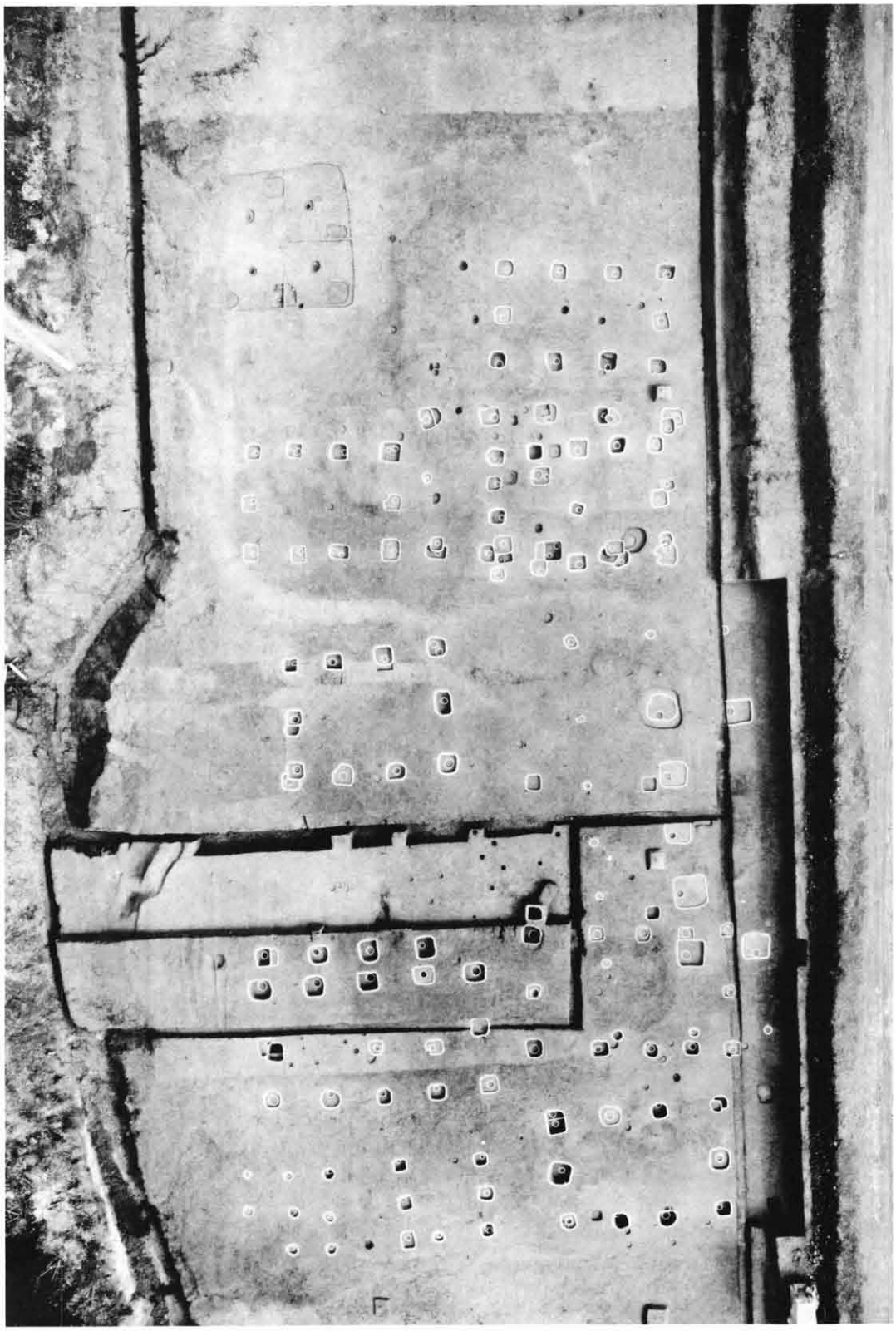
第 31 号

遠所古墳群の発掘調査……増田　孝彦……1
桑飼上遺跡の掘立柱建物群……細川　康晴……12
伽倻前史を彩る文化遺産
　—韓国義昌・茶戸里遺跡発掘調査概報—……李　健茂（訳 松井忠春）……19
—昭和63年度発掘調査略報—……26
　9. 日光寺遺跡　　11. 青野西遺跡
　10. 三宅遺跡　　12. 北谷城跡・西八田城跡
資料紹介　私市円山古墳出土の胡籙金具……鍋田　勇・石崎　善久……36
　千代川遺跡出土の木製品……鵜島　三壽……40
研究ノート　編年作業における弥生土器
　様式論の諸問題……濱田　延充……43
府下遺跡紹介　43. 井手寺跡……48
長岡京跡調査だより……51
センターの動向……56
受贈図書一覧……57

1989年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

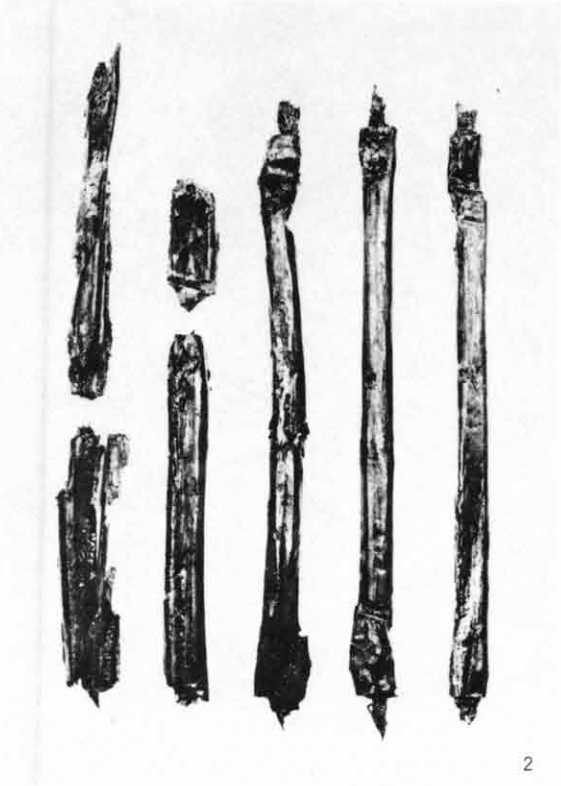
図版第１　　桑飼上遺跡の掘立柱建物群



桑飼上遺跡掘立柱建物跡群（上層遺構）

図版第2　伽倻前史を彩る文化遺産（韓国義昌郡茶戸里遺跡）

1

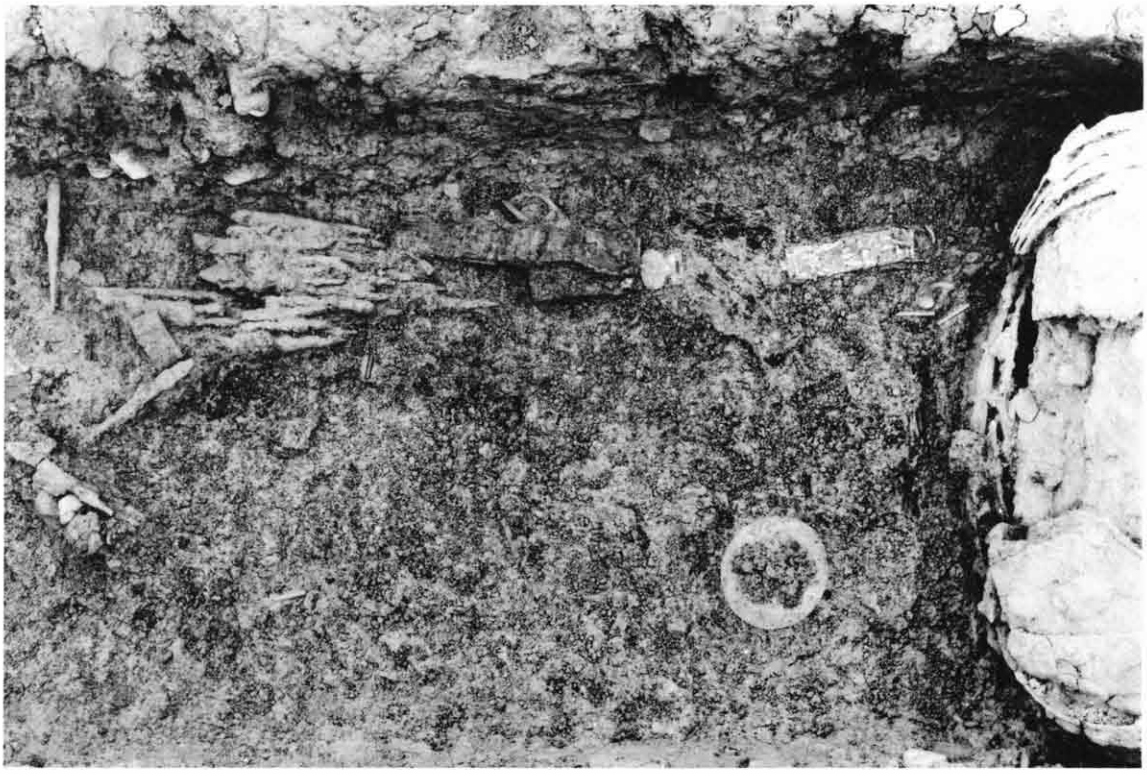


2

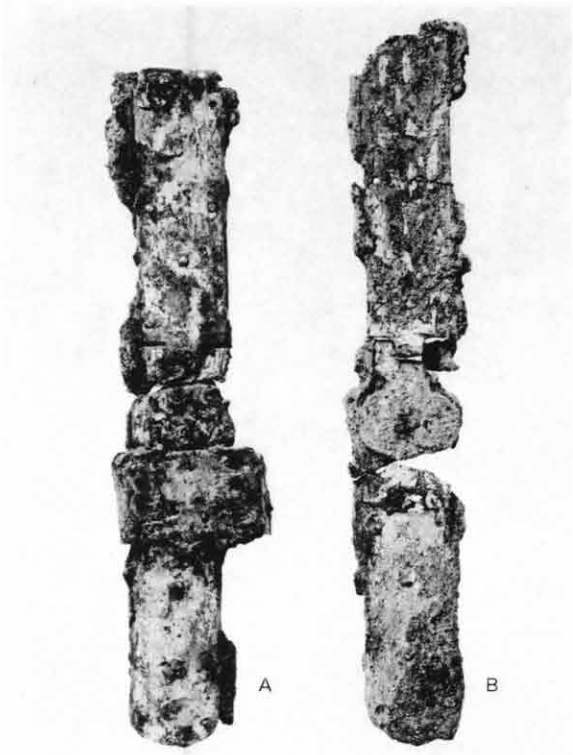
3

出土遺物三例
（1：漆塗木製高杯，2：柄筆，3：五銖銭）

図版第３　私市円山古墳出土の胡籙金具



(1)　第１主体部　胡籙金具他出土状況（下が北）



(2)　吊手飾金具（表）

(3)　吊手飾金具（裏）

遠所古墳群の発掘調査

増　田　孝　彦

1. はじめに

遠所古墳群は，京都府竹野郡弥栄町木橋小字遠所に所在する。この調査は，農林水産省近畿農政局が計画，推進している「丹後国営農地開発事業」の鴨谷団地造成工事に伴い実施したものである。

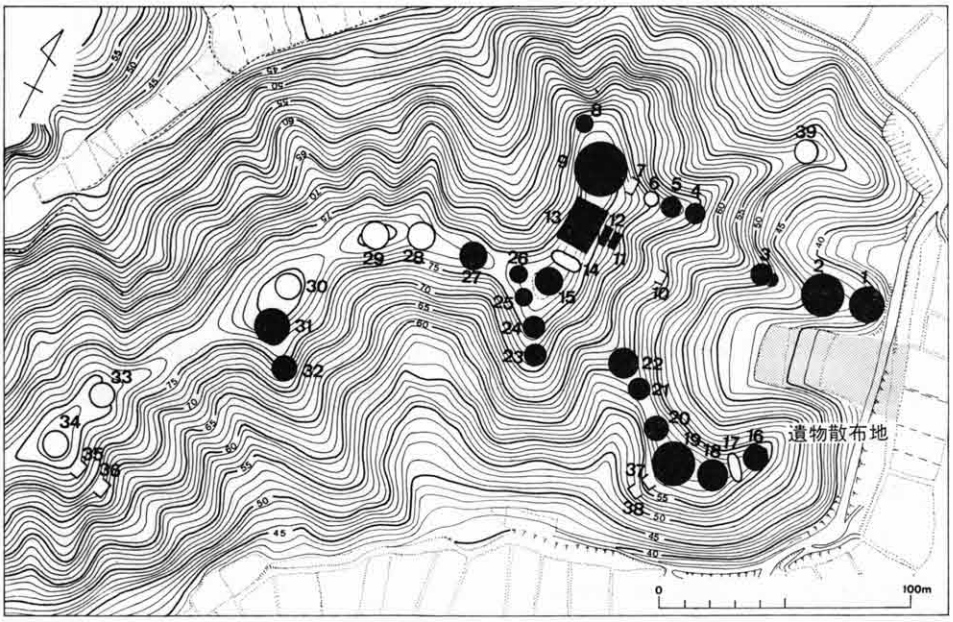
古墳群は，弥栄町西端，網野町との町境の標高41～81mの丘陵上に分布する。ここは，昭和33年に発掘調査され，冑や短甲，舟形埴輪等が出土して注目を集めたニゴレ古墳(注1)(5世紀中頃)が位置する谷の南，奥へ200mのところでもある。

この丘陵上には，分布調査等により横穴式石室，木棺直葬を内部主体とする古墳，古墳状隆起，台状墓状を呈するものとして21基の古墳が確認されていたが，調査に着手し，対象地の伐採が終了した段階では，これらは39基となった。古墳群は谷の奥まった位置にあるため，大半の古墳は周辺の丘陵に視野を妨げられ，平野部(竹野川流域)を見渡すことができないが，尾根高所に位置する古墳からは，平野部はもとより日本海(網野町浅茂川海岸)を望むことのできる景勝地に築造されている。丘陵上には，昭和2年の丹後大震災の時にその影響を受けてできたと思われる地すべり，地割れが各所にみられた。1・2号墳については，昭和28年頃に石室の調査が行われているが，詳細は不明である。

古墳群周辺の丘陵，水田では，奈良時代の須恵器窯跡や，時期は不明であるが製鉄炉，炭窯，窯状遺構，それらに伴うと思われる住居跡があり，谷部・丘陵斜面からは5世紀末頃から8世紀中頃にかけての遺物が散布しており，数多くの遺構が広範囲にわたって存在するようで，現在確認調査を実施している。

第1図　調査地位置図

古墳群の調査は，昭和62年度に1号墳の調査を実施し，竹野川流域では初の竪



第2図　遠所古墳群古墳分布図

穴系横口式石室を内部主体とする古墳の調査となった。(注2) 本年度は，2～30・33～39号墳までが調査対象となった。31・32号墳については，来年度の調査予定である。

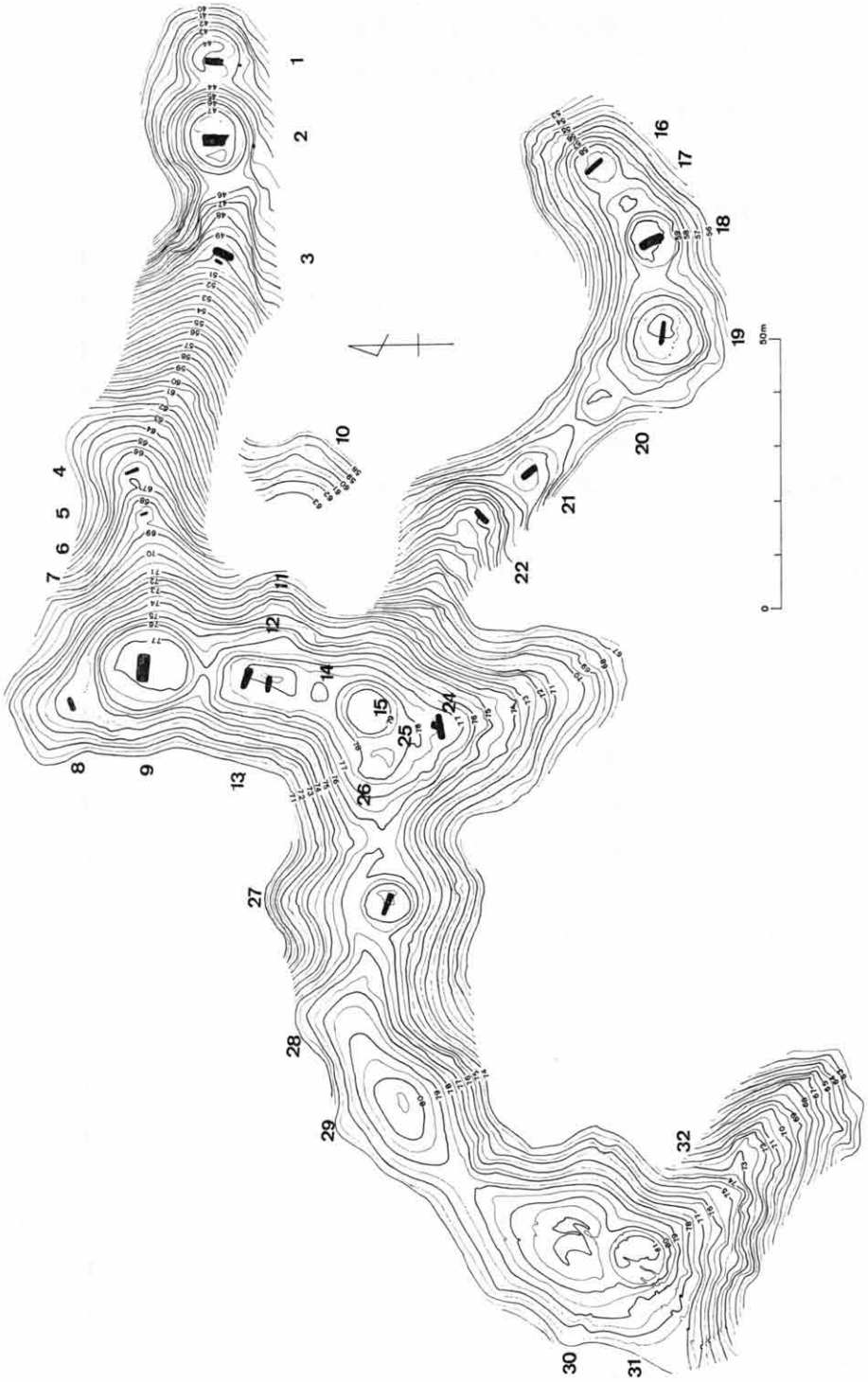
2. 調査概要

調査の結果，6・7・10・14・17・28・29・30・33～39号墳については，古墳として認められなかった。上記したもの以外は，古墳や古墳に伴う施設と判断し，一覧表に示したが，現在も調査中であり，埋葬施設の調査は終了していても，墳丘の調査が終了していないものが多く，墳丘規模等は略測のものもある。あらかじめ御理解願いたい。

墳丘　墳形は，いずれも円形をなすが，1基(13号墳)のみ方墳がある。また，墳丘に伴う施設と考えられる3号墳東側の平坦部や，11・12号墳は舌状や長方形を呈する。

古墳の築造方法は，丘陵の削り出しと小規模な盛土により，円形・方形台状に整形し，埋葬施設を設けた後，若干の盛土を施し墳丘を成形する。古墳群中最大規模を誇るものは，9号墳(径21m・高3m)となるが，直径に比して高さがあまりないため，代わって2号墳(径17m・高5m)や1号墳(径14m・高4m)の方が雄大にみえる。この1・2号墳については，先にも述べたように，盗掘や石室内の調査が行われたりしており，盛土の流失がかなり認められることから，築造時はかなり大きかったと思われる。

各古墳には，外部施設として古墳周囲や，尾根稜部には溝が設けられており，古墳と古


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
50m

第3図 古墳群地形図

墳，古墳と自然地形とは明確に区画されている。このように，尾根稜線上は溝により区画されているため，墳丘基底部が明瞭であるが，尾根側面側はそれを区画するような痕跡は認められなかった。このことは，尾根稜部平坦部面積の広いところに築造されている27・31号墳でも，古墳周囲に「C」字状に溝が設けられているだけであり，側面側にはそれを区別する痕跡は他の古墳同様認められない。

その他，埋葬施設は認められなかったが，古墳裾部に人工的な平坦部が削り出された部分が3号墳と13号墳下方(11・12号墳)に3か所認められた。3号墳東側裾平坦部では，墳丘と平坦部との境に尾根に直交する形で土師器甕・壺・甕という順に等間隔で並べられていた。11・12号墳については，遺物はほとんど出土しなかったが，埋葬施設を設けるには，平坦部の幅が狭いため，古墳として造営されたとは考えがたく，3号墳の遺物出土状況等からすると，これらの平坦部は，古墳に伴う祭祀をとり行った場所とも考えられる。

埋葬施設　遠所古墳群は，調査の結果，木棺直葬と石室という2種類の埋葬施設が検出された。このうち，石室はいずれも竪穴系横口式石室である。未調査である31号墳からも石材の散乱が認められることから，同様の石室になる可能性がある。以下，竪穴系横口式石室と木棺直葬と分け概要を述べてみたい。

竪穴系横口式石室(1・2・27・31号墳)　1・2号墳は，盗掘や石室の調査により石室自体がかなり荒れており，良好な保存状態であると考えていた27号墳も採石等により，一部石材がなくなった部分も認められた。天井石は，1・27号墳で1石残存していたが内部に落ち込んでいた。石室の残存状況は2号墳がもっとも悪く，最下段の石材が部分的に認められた程度であった。石室は最下段に大きめの石材を配し，2段目からは大小さまざまな石材を用い積み上げている。27号墳でみた場合，横口部から玄室には階段状に降りる構造をなしており，この部分には大きめの石材を2石配している。1・2号墳では，横口部に石材は残存していなかったが，石材を抜き取った痕跡や，横口部が玄室床面より一段高くなることから同様な構造をもつと思われる。閉塞石は，27号墳に残存しており，階段状施設の外側の石室側壁最前端に人頭大の石を約4段積み上げて閉塞する。横口部より墳丘外側には浅い墓道状のくぼみによりつながっている。これらの石室の構造は，弥栄町吉沢の新ケ尾東10号墳と同様(注3)なものである。27号墳に限ってではあるが，墓道前面の墳丘斜面に，幅4mにわたって拳大から人頭大の石が溝底面より上方へ約0.75m程貼られていた。

石室の規模は，1号墳についてはすでに速報として出したが(注4)，2号墳が全長4.8m，玄室長3.8m，同幅1.6m，同高0.95mを，27号墳が全長4.2m，玄室長2.8m，同幅0.8～1.23m，同高0.9mをそれぞれ測り，入口幅が狭く奥壁側にバチ状に開く。いずれも無袖式の竪穴系横口式石室である。石室の主軸は，1・2号墳がほぼ南北方向で南開口，27・

31号墳がほぼ東西方向で西に開口し，開口方向に規則性が認められる。また，本古墳群の竪穴系横口式石室墳の特徴は，新ケ尾東10号墳と異なり，石室入口および玄室床面が墳丘中位にあるという点があげられよう。

遺物は，1・2号墳とも石室内からほとんど出土しなかったが，少量の須恵器・土師器・鉄器とともに馬具(轡・鐙等)がみられ，2号墳からは，鉄地金銅張鞍が1点出土している。27号墳は，玄室内は良好な保存状態であったが，遺物量としては少なく大半が追葬時の遺物であった。初葬時の遺物と思われるものは，奥壁側に寄せ集められた人骨と鉄鏃・須恵器5点ほどであり，大半の遺物は追葬時にかたづけられたようである。

調査が完全に終了した1・2号墳をみると，祭祀を行った痕跡が認められる。石室の中心線を墳丘裾にのばしたその西側には土坑を設けており，その中に1号墳では土師器甕1個体，2号墳では土師器小型丸底壺，小型甕をそれぞれ埋納していた。また，1号墳では石室や墳丘を作っていくたびに祭祀が行われたようで，(1)石室が完成した段階で墳丘の盛土とともに，土師器壺に須恵器蓋をかぶせ立位で埋める，(2)天井石まで盛土が完成した段階，(3)墳丘が完成する寸前の段階，(2)(3)の段階ではそれぞれ土師器高杯が2～3個体供えられており，3段階にわたり祭祀が行われたようである。また，同じく1号墳の西溝の南側の平坦部分では祭祀に使用されたと思われる須恵器の一括資料(杯身・杯蓋，高杯，壺，甕，甕)が多数出土した。出土した遺物から，これらの竪穴系横口式石室墳は，6世紀後半段階でも早い段階で築造され，6世紀末頃に追葬が行われたと考えられる。

木棺直葬　埋葬施設が検出された古墳は，3～5・8・9・13・16・18・19・21・22・24号墳である。埋葬施設は，13・24号墳のみ複数(2主体)埋葬であり，その他は，1古墳1主体となっている。3号墳西側でも浅い墓壙状の掘り込みが認められたが，墓壙と断定するには至らなかった。時期は異なるが主体部の横に小さな土壙状の掘り込みをもつ例として，弥栄町鳥取の宮ノ森1号墳第2主体部があるが，これからは管玉や滑石製紡錘車，刀子等が出土し，第1主体部に伴う副葬品のみを埋葬した副室的な土坑としてとらえられている。

墓壙は，素掘りのものと，木棺を納める部分だけさらに一段掘り込み，二段の墓壙掘形を有するものと2種類ある。墓壙の主軸は，基本的には尾根に直交する形をとるが，19・21号墳のように尾根平行になっているものもある。

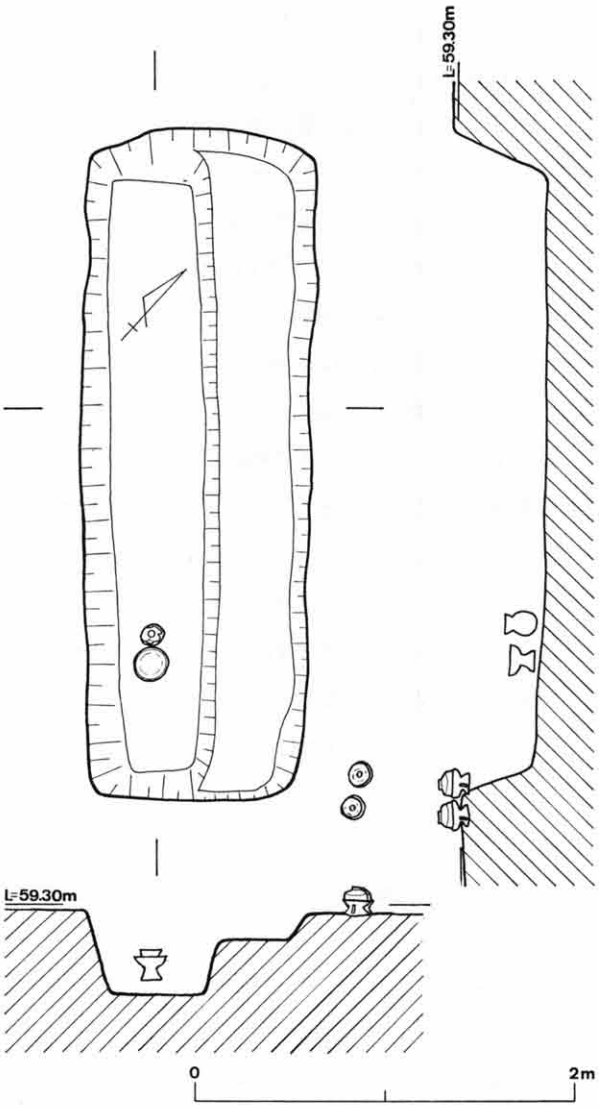
素掘りの墓壙をもつ古墳としては，4・5・13・16号墳がある。墓壙平面は，隅丸長方形を呈し，4・5・16号墳は北側短辺が南側に比して短く，13号墳は西側が短い。16号墳の場合のみであるが，墓壙検出面西側に南北方向に拳大の石を長さ1.55mの間に4石置きこれを幅0.65mで2列に平行に並べていた。祭祀等を行った時に，石の上に板等を置いて

祭壇として使用されていたとも考えられる。墓壙の規模は，いずれも３m前後である。

墓壙内からは，４号墳では南側より須恵器・土師器の転用枕(須恵器杯身・杯蓋，土師器椀)，刀子１・鉄鏃１が，５号墳も南側より管玉２，ガラス玉７，鉄鏃１が出土した。13号墳は東側端から土師器椀が，16号墳では南側に勾玉３，ガラス玉250個が集中し，中央部から北端にかけては，刀子２，鉄鏃７が出土している。

二段掘形を有する墓壙は，いずれも隅丸長方形の平面形をなすが，木棺部掘形が墓壙中央部に設けられず，片側に寄せられているものがある(21・22号墳)。墓壙は，９号墳の長さ6mを最大に，墳丘の大きさに墓壙規模も比例しているようで，10m以下の墳丘規模を有するものは，墓壙規模が4.2m以下となっている。

木棺部掘形内には，木口部分の固定を石(３・18号墳)，粘土(19号墳)，粘土と石(13・24号墳)で固定したものがあり，使用されていた木棺は箱形の組合式木棺であったと考えられる。24号墳の第２主体部のように，木口部分に側板の幅がわかるような，枘状のくぼみが認められるものもある。この主体部の場合，使用されていた板材の厚さは約2cmである。また，両木口間の長さが50cm，棺内幅が約30cm程しかないという小さいもので，乳児および胎児を埋葬していたと思われる。18号墳では，棺内底面が北下がりとなっており，水平を保つようにするためか，底面に棺に直交



第４図　21号墳主体部実測図

する形で1列2石を3列にわたり拳大の石を配するという棺台状の施設も認められた。木口を固定する施設のないものは，箱形の木棺が使用されていたと考えられる。

出土した遺物は，南側に転用枕が認められたもの(3号墳)と，東側に認められたもの(9・13・24号墳)があり，いずれも須恵器杯身・杯蓋を伏せた形で用いるが，24号墳の場合は土師器椀である。9号墳の場合は，西側にも転用枕状の須恵器杯身・杯蓋が伏せ並べられていたが，出土状況からすると副葬品として置かれていた可能性もあるが，東・西側のどちらが転用枕となるかいずれとも断定することはできなかった。特異な転用枕の使用例としては，4号墳があげられる。三角形になるように置かれており，墓壙南端側に三角形の頂点がくるようにし，頂点部分に土師器椀，底辺側に須恵器杯身，杯蓋を伏せ並べていた。

鉄製品の副葬は，ほとんどなく，刀(30cm程度のもの)，刀子，鉄鏃の3種類が出土しているが，武器類のみで農工具類は認められない。3種類とも副葬されていたものは18・19号墳で，刀子・鉄鏃の2種類が4・9(第2主体部)・13号墳，鉄鏃のみが5号墳，24号墳(第2主体部)，刀子のみは24号墳(第1主体部)という出土状況である。量的には，9・13(第2主体部)・18・19号墳が多いが，素掘りの墓壙を埋葬施設としていた16号墳とさほど変わらない。その他のものについては2・3点の副葬である。

棺内に転用枕以外の土器の埋納が認められたものには19号墳がある。棺内東端に須恵器高杯と土師器壺を立位で検出した。

頭位方向については，素掘りの墓壙，二段掘形を有する墓壙とも遺物出土状況，転用枕等から，3つの方向が求められた。東枕(9・13・24号墳)，西枕(19・21号墳)，南枕(3～5・16・18号墳)があり，8・9・22号墳については，いずれとも断定できなかった。

木棺直葬墳でも，先述した墳丘裾部に設けられた平坦部や，16号墳西側の石列以外にも祭祀をとり行ったと思われる痕跡が各所に認められた。祭祀の痕跡は，(1)1号墳同様墳丘盛土中に遺物が含まれるもの，(2)墓壙検出面横に遺物が認められるもの，(3)墳丘及び墓壙上面に遺物が認められるものの，3つの形態がある。

(1)は，13・15・19号墳に認められたもので，いずれも表土下約30cm付近で検出され，墳丘肩部近くに位置する。13号墳では，有蓋高杯1セット，15号墳は須恵器甕？(現在復原中)，19号墳では有蓋高杯2セットと有蓋高杯の高杯のみの計5点が埋められていた。

(2)は，21号墳に認められたもので，被葬者の埋葬とともに祭祀が行われたようで，墓壙検出面東端で，墓壙長軸方向に平行する形で，有蓋高杯が2セット立位で置かれていた(第4図)。

(3)は，3・9・22号墳に認められたもので，3号墳は墓壙上面及び検出面にかけて多

量の土師器甕片の散乱が認められた。22号墳は，墳丘上に須恵器大甕，杯身片が散乱していた。9号墳は，被葬者埋葬後，若干の盛土が施された後，大規模な祭祀が墳丘上で行われたようで，墓壙上面の盛土中より須恵器杯身・杯蓋・短頸壺・広口壺・瓮・提瓶・甕・器台，土師器椀・壺等が出土した。これらの遺物の一部は，木棺の腐朽とともに墓壙内に落ち込んでいたものもある。

木棺直葬墳については，出土した遺物から築造時期は5世紀末～6世紀前半，6世紀後半と考えられる。

3. ま と め

遠所古墳群は，未調査古墳2基を含む総調査地点39か所中，調査の結果，古墳や古墳に伴う人工的な施設と考えられるものは24か所となった。以下，調査成果についてまとめを行い，若干の問題点を提示して結びとしたい。

古墳の立地についてみてみると，低丘陵上の稜部に墳丘を接するかのように連接して築造されているかのようにみえるが，詳しく観察すると，古墳と古墳が接せず，その中間に島状にとり残された部分や，古墳と古墳の間が広いもの等が見られる。築造時期を無視して見た場合9グループに分けられる。また，台状墓状を呈していたものについては，古墳とは認められず，古式須恵器が出土し，墳丘が整備された古墳群中では，台状墓的なものは存在しないという結果が出た。今後の分布調査等に問題を提示したものであろう。

墳丘は，盛土がすべて施されているが，盛土が少ないものでも，尾根の削り出しが大きく墳丘高があり各々が独立性を帯びている。また，尾根に直交する方向については，溝が設けられているため墳丘裾部は明瞭であるが，尾根側面については判然としない。このことはすべての古墳に共通していた。

埋葬施設については，竪穴系横口式石室と木棺直葬という異なる主体部を検出した。

竪穴系横口式石室については，未調査古墳である31号墳も含めて4基あるが，古墳群中検出した石室はすべて竪穴系横口式石室であり，横穴式石室は1基も含まれないという特色を有する。竹野川流域では，弥栄町吉沢の新ケ尾東10号墳（6世紀末），竪穴系横口式石室の可能性が指摘されている峰山町と弥栄町境にあるスクモ塚28号墳（6世紀末）[注5]の2例のみである。その他，京都府北部でみると，天田郡三和町流尾古墳[注6]，福知山市池の奥4号墳[注7]，宮津市梯倉山1号墳[注8]，与謝郡加悦町入谷西A－1号墳[注9]の4例が知られているが，いずれも6世紀前・中頃の築造であり，その分布も分散している。全国的にも横穴式石室盛行期にそれを受容せず，1古墳群中4基も存在するという特殊性があり，遠所古墳群を形成した集団がどのような性格を有していたか，類例のある地域との交流の中でその結びつきを考

えていく必要があろう。また，石室の主軸や，馬具の副葬など，丘陵先端の１・２号墳と頂部の27・31号墳とはその性格が異なるようである。

木棺直葬については，総数14基の主体部を検出したが，13・24号墳については複数埋葬であったが，その他は１古墳１主体が厳密に守られ，独立性が認められる。埋葬施設の認められなかった古墳については，当初から設けられていなかったものか，天災等により流失したものかは今後の検討課題となろう。

木棺は，箱形組合式木棺，箱形木棺が使用されていたと思われ，木口部分を石・粘土・粘土と石を混ぜて固定しているものもみられた。また，これらのうち，24号墳第２主体部は，木口部分の形状から，板材の厚さまで推定できる好資料となった。

頭位方向については，石室の主軸同様，南，西，東と３方向に限られており，方向性があるものと考えられる。

出土した遺物は，土器類，鉄製武器類(刀・刀子・鉄鏃)，装身具類(勾玉・ガラス玉・管玉)がある。いずれも棺内から出土したものであるが，19号墳の刀のみ棺上に置かれていたと考えられる。玉類では，16号墳出土の253個は注目される。小規模な墓壙であり，群中から玉類の出土する古墳は５・16号墳であり，被葬者の性格は異なると思われる。

出土した遺物は，現在整理中であり，遺物の検討もあまり進んでおらず，また，土器が出土しなかった古墳もあり，その築造時期を現段階で明確にすることはできないが，おおむね５世紀末～６世紀初頭に９号墳を中心とする南尾根より築造が始まり，６世紀前半～中頃に，４・５号墳のある北尾根，13号墳を中心とする古墳群中央部に１～２基ずつ築造しながら移行していったと思われる。そして，石室が築造される６世紀後半には，築造スペースの空いている部分を利用したため，各所に分散したものと思われる。また，同じ６世紀後半頃の築造でも石室と木棺直葬の異なる埋葬が行われており，同じ在地有力者でも格差・規制があったものと思われる。

また，墳丘や埋葬施設横などでは，墓前祭等の祭祀の痕跡がよく残っており，さらに南尾根と北尾根の中間の谷部には，未調査ではあるが，ミニチュア土器や多量に遺物が散布する部分(第３図)が認められ祭祀遺構が存在するようで興味深い場所でもある。この地域の当時の祭祀の一端をうかがう好資料となろう。

今回の調査では，丹後でも調査例の少ない須恵器導入段階と考えられる古墳の調査を行った。丹後地域においては，近年丘陵上に展開する小規模な木棺直葬墳の調査資料が増加しているが，いずれも当地域の特色である弥生時代からの方形台状墓の系譜を引く墳墓立地の形態であり，その内容については不明な点が多い。このような中で，今回の調査は，丘陵上に展開する墳丘が整備された古墳群のあり方を考える上で重要な資料を提供した。

（ますだ・たかひこ＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

墳丘・埋葬施設規模一覧表
（古墳として認められなかったものは除外した。）

番号	墳形	墳丘規模	外部施設	内部主体	主体部規模	築造時期
1	円	径14m・高4m	溝	竪穴系横口式石室	全長3.72m 幅1～1.35m・高1.4m	6c後
2	円	径17m・高5m	溝	竪穴系横口式石室	全長4.8m 幅1.6m・高0.95m	6c後
3	円	径8m・高2m	溝	木棺直葬	長4.12m×幅0.95m	6c後
4	円	径8m・高2m	溝	木棺直葬	長2.86m×幅0.55～0.7m	6c前
5	円	径8m・高1.5m	溝	木棺直葬	長1.9m×幅0.55m	6c前
8	円	径7m・高1.5m	溝	木棺直葬	長2.57m×幅0.86m	6c前
9	円	径21m・高2.8m	溝	木棺直葬		6c前
11	方	8m×3m・高1.6mの平坦部。埋葬施設は認められなかった。				不明
12	方	7m×2m・高1.5mの平坦部。埋葬施設は認められなかった。				不明
13	方	17m×14m 高2.3m	溝	木棺直葬	第１主体部　長3.15m×0.74m。第２主体部　長4.33m×幅1.32m	6c前
15	円	径11m・高1.5m	溝	埋葬施設は認められなかった。		5c末
16	円	径10m・高1.8m	溝	木棺直葬	長3.46m×幅0.71m	5c末
18	円	径12m・高2m	溝	木棺直葬	長5.04m×幅1.73m	5c末
19	円	径17m・高2.8m	溝	木棺直葬	木棺のみ長4.6m×幅0.7m	5c末
20	円	径8m・高1m	溝	埋葬施設は認められなかった。		5c末
21	円	径9m・高1.3m	溝	木棺直葬	長3.53m×幅1.21m	5c末
22	円	径12m？・高4m	不明	木棺直葬か？	主体部は流失	
23	円	不明	不明	埋葬施設は認められなかった。		不明

番号	墳形	墳丘規模	外部施設	内部主体	主体部規模	築造時期
24	円	不明	不明	木棺直葬	第1主体部　長1.33m×幅1.2m。第2主体部　長4.67m×幅1.22m	6c後
25	円	径7m・高1.5m	溝	埋葬施設は認められなかった。		不明
26	円	径6m・高1.3m	溝	埋葬施設は認められなかった。		不明
27	円	径11m・高1.8m	溝	竪穴系横口式石室	全長4.2m・幅0.8～1.23m，高0.9m	6c後
31	円	径14m・高2.3m	溝	未調査		不明
32	円	径10m・高2m	不明	未調査		不明

注1　西谷真治・置田雅昭『ニゴレ古墳』(弥栄町文化財調査報告書第5集　弥栄町教育委員会) 1988

注2　増田孝彦「昭和62年度発掘調査略報　7.遠所古墳群(1号墳)」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987.12

注3　増田孝彦・佐伯英樹「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡(3)新ケ尾東古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988

注4　注2に同じ

注5　岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要〔2〕スクモ塚古墳群Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会)　1988

注6　衣川永一『夜久野の古墳』1969　京都府立丹後郷土資料館「丹波夜久野の文化財」1976

注7　大槻真純，崎山正人「池の奥古墳群」(『福知山市文化財調査報告書』第7集　福知山市教育委員会)　1985

注8　大石　信・佐藤晃一「倉梯山1号墳の記録」(『宮津市文化財調査報告』1　宮津市教育委員会)　1980

注9　佐藤晃一「入谷西A1号墳―調査の概要―」(『加悦町文化財調査概要』2　加悦町教育委員会)　1983

桑飼上遺跡の掘立柱建物群 〈図版第1参照〉

—昭和63年度の調査から—

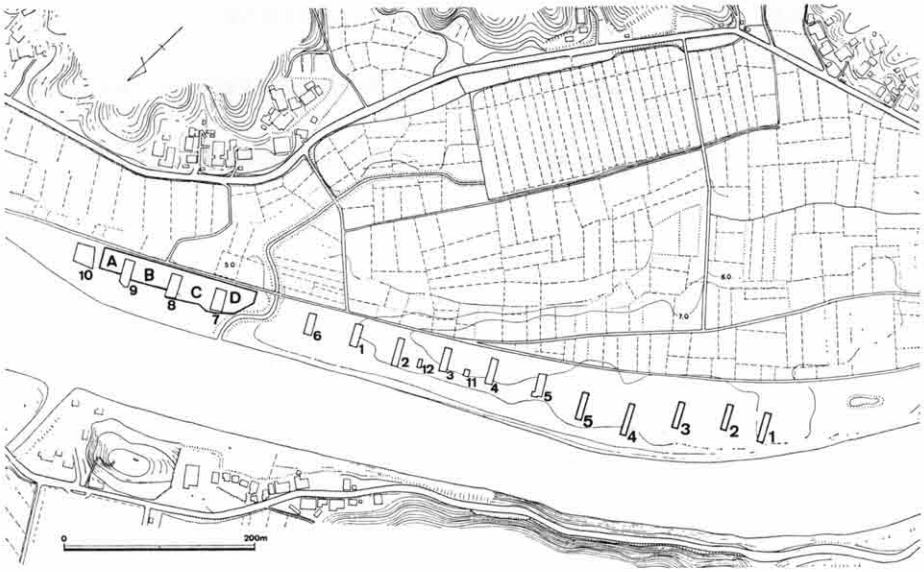
細　川　康　晴

1. はじめに

桑飼上遺跡は，京都府北部最大の河川，由良川の自然堤防上に立地する数ある複合集落遺跡の一つである。近年，由良川中・下流域では，河川改修・近畿自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査が相次ぎ，資料の蓄積が著しい地域となっている。過去5年間の話題に上ったものを列挙しても，綾部市私市円山古墳，福知山市広峯古墳群，舞鶴市志高遺跡などが，新聞紙上を賑わしたことが記憶に新しい。今回の報告は，建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した由良川下流域の河川改修に伴う調査の中で，C・Dトレンチに広がる奈良時代に比定される大型方形柱掘形をもつ掘立柱建物跡群について報告する。

2. 調査の概略

掘立柱建物跡群は，C・Dトレンチのうち，東西44m・南北24mの範囲に集中して分布



第1図 トレンチ設定図

付表 掘立柱建物跡一覧表

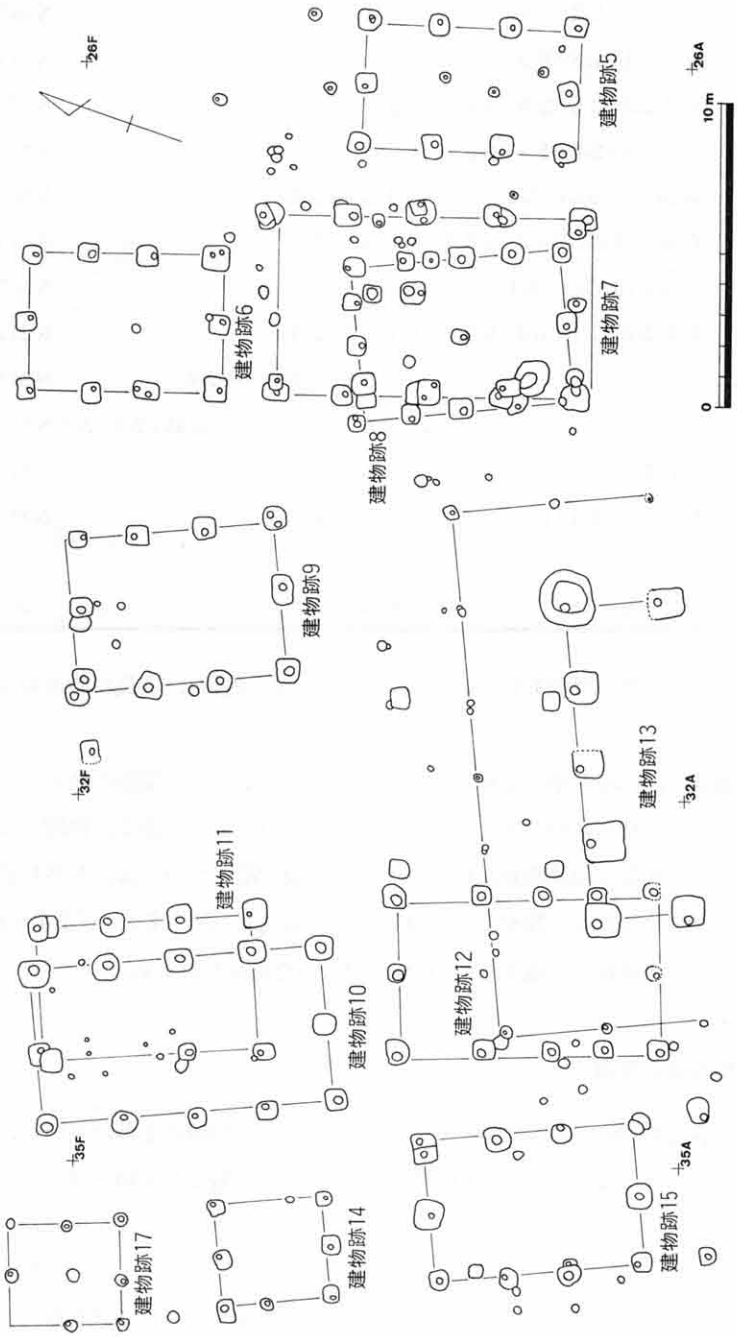
番号	柱間	南北長 m	柱間寸法(南北)	東西長 m	柱間寸法(東西)	主軸	期
5	2×3	6.8	2.2+2.2+2.4	4.1	2+2.1	N16°W	E
6	2×3	6.4	2.1+1.8+2.5	4.4	2.2+2.2	N18°W	D
7	2×4	10.3	2.3+2.5+2.6+2.9	5.9	3+2.9	N18°W	D
8	2×4	6.9	1.6+2.0+1.7+1.6	4.95	2.4+2.55	N24°W	B
9	2×3	7.25	2.4+2.45+2.4	4.9	2.7+2.2	N24°W	B
10	2×4	10.25	2.45+3.35+2.4+2.4	5.1	2.6+2.5	N24°W	B
11	1×3	7.15	2.35+2.4+2.4	4.4	4.4	N22°30′W	C
12	2×4	8.6	2.8+2.1+1.8+1.9	5.1	2.6+2.5	N20°30′W	A
13	4×?	?	—	10.3	2.6+2.5+2.6+2.6	N24°W	B
〃柵	6×?	?	—	17.3	3.5+2.65+2.5+2.55+2.6+3.5	N24°W	B
14	1×2	3.7	3.7	3.4	1.7+1.7	N24°W	B
15	2×3	6.9	2.3+2.1+2.5	4.8	2.3+2.5	N24°W	B
16	—	—	—	—	—	—	—
17	2×2	3.7	1.9+1.8	3.4	1.7+1.7	N20°30′W	A

する。遺構検出面の標高は約4.7m，現地表面からの深さ約1m，由良川の水面高は平均約0.4mである。

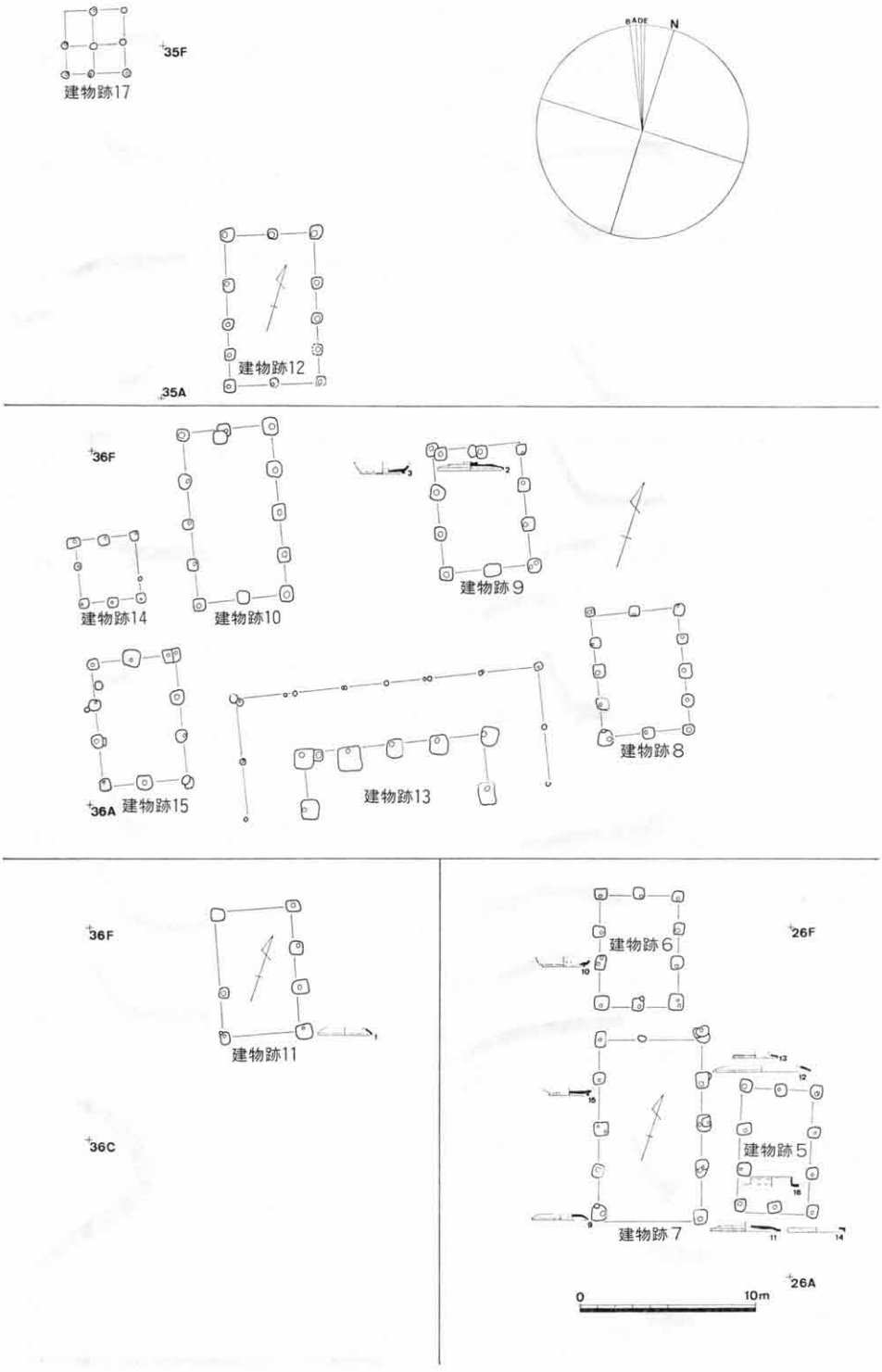
建物跡の総数は，13棟を数えるが，若干の建物跡は，切り合い関係を持ち，すべてが同時に存在しない。各建物跡のデータについては，付表のとおりである。柱間は2間×3間ないしは，2間×4間の南北棟が主体を占める。柱間寸法については，各建物跡内においても，ばらつきが見られる。柱掘形は，ほとんどが隅丸方形であり，一辺0.6～1.4mを測る。柱の太さは，柱痕跡から最大のもので直径40cmを測るものもある。

3. 建物の構造と変遷

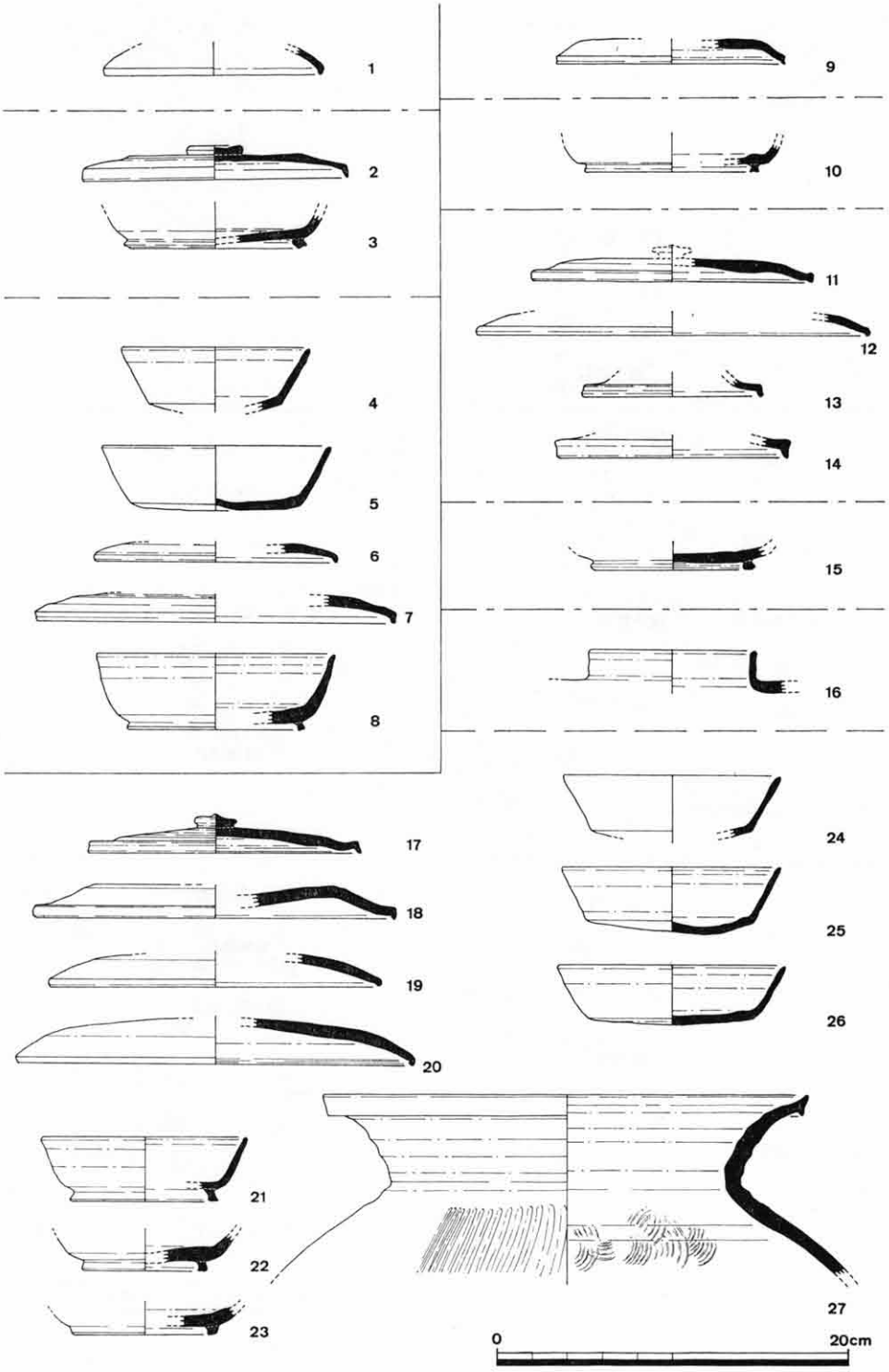
はじめに，各建物跡群の時期設定について触れる。各建物跡の主軸について，グラフに示すと第3図のようになる。すべての建物が真北より西に偏した主軸を持つ。主軸方位によりA～Eの5期に分類した。しかし，C期とした建物跡11は，規模や位置が若干異なるものの，建物跡10の建て替えと見られ，主軸差も1°30′である。従って，C期は，B期にほぼ含めて考えることもできる。また，E期とした建物跡5は，D期建物跡群と主軸こそ異なるものの，D期建物跡群と組み合わせて，L字形配置と考えることも可能であり，D期建物跡群にわずかに遅れて追加された建物と見ることもできる。すなわち，建物配置，



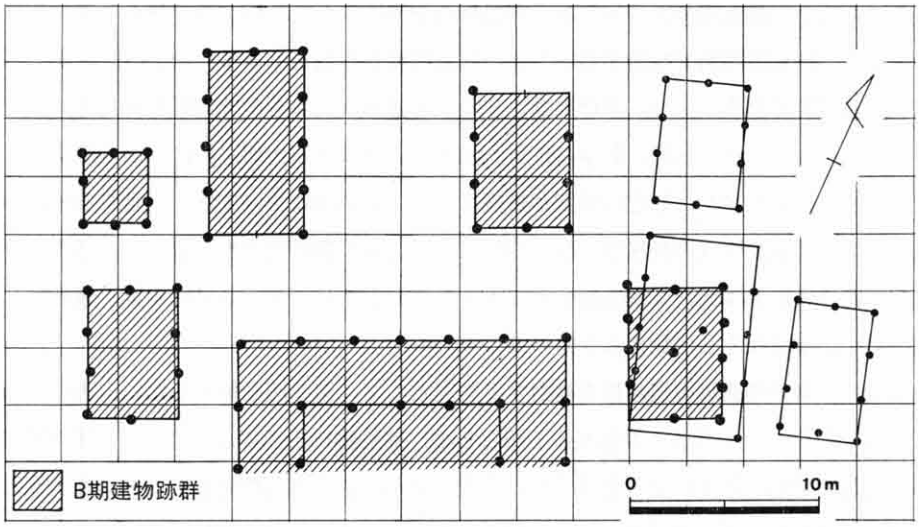
第2図　C・D区掘立柱建物跡群配置図


35F
建物跡17
N
建物跡12
35A
36F
建物跡14
建物跡10
建物跡9
建物跡8
36A
建物跡15
建物跡13
36F
建物跡11
36C
26F
建物跡6
建物跡5
建物跡7
26A
0
10m

第3図 建 物 跡 の 変 遷


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
20cm

第4図　出　　土　　遺　　物



第5図　B 期 建 物 跡 群 配 置 図

主軸方位から見た建物跡群の時期設定は，A・B・Dの3期に大別できる。

次に，各期における建物配置と構造の変遷について触れる。A期建物跡群としたものは，調査区内では，2間×4間の南北棟と，2間四方の総柱建物跡の2棟のみしか検出しておらず，全体の配置は不明である。B期建物跡群としたものは，最も建物数が多く，計6棟を数える。建物跡13を中心に，建物跡15と7，10と9というように，南北棟が左右対称に配置される。建物跡14は，南北の柱間が不規則ではあるが，全体として，正方形プランである。また，最も特徴的なことは，建物跡13を取り巻く円形柱掘形列である。これは，建物跡13の柱列と同一の主軸を持つばかりか，建物跡13の柱痕と，南北・東西ともに柱通りがことごとく通るという点を指摘したい。しかし，掘形自体は，径30cm前後・深さ5～20cm，柱痕も径5～10cm程度であり，建物跡13の主体的構築物とはなり得ず，あくまでも柵列などの付設的施設とも考えられる。D期建物跡群としたものは，前述のように，建物跡7を中心に，3棟によりL字形配置を取る。各期の先後関係については，建物跡12と13，建物跡7と8の柱穴が，切り合い関係を持つことにより，A→B→Dとなる。

4. まとめにかえて

ここでは，各期の年代と，B期建物群の規格性について触れ，まとめに代えたい。

第4図に，柱掘形埋土出土遺物と，建物跡群周辺包含層出土遺物について，実測可能なものを図示した。これらは，型式学的に既ね2大別できる。1～3は，B・C期建物跡群出土のものであり，I群土器とする。包含層出土遺物のうち，これに対応するものは，4

～８である。Ⅰ群土器では，蓋が笠形の器高のやや高い１，端部がやや長く垂下する２・６・７で，杯が内端面で接地する高台３，などの要素が抽出できる。一方，９～16は，D・E期建物跡群出土であり，Ⅱ群土器とする。包含層出土のもので対応するものは，17～27である。これらは，蓋は，Z字状に折れ曲がる口縁11・17・18，杯は，高台が細く，やや直立する10・22・23，などの要素が指摘できる。実年代については，推定する確たる根拠がないが，奈良時代の良好な一括遺物である丹後大田鼻横穴群出土遺物と対応させれば，Ⅰ群土器は大田鼻４期，Ⅱ群土器は大田鼻５期に対応し，前者は８世紀中葉，後者は８世紀後葉の土器様相として捉えられるのではないか。

最後に，B期建物群の規格性を検討する材料[注]として，第５図を提示したい。方眼の単位は30mである。ここでは，復原案の１例として，建物跡13を基準としてみた。建物跡13と各建物跡の間隔が等間に割り付けられ，南北・東西の柱通りも部分的にでも揃えようとする意図が読み取れるのではないか。桑飼上遺跡の調査は，現在も継続中である。今回提示した問題は，今後も引き続き検討していきたい。

（ほそかわ・やすはる＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

注　岡田晃治・細川康晴・森正ほか「〔2〕大田鼻横穴群」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1987）』京都府教育委員会）1987

伽倻前史を彩る文化遺産 〈図版第2参照〉

—韓国義昌・茶戸里(タホリ)遺跡発掘調査概報—

李　　健　茂

1. はじめに

国立中央博物館学芸研究室は，1988年1月21日から同年4月27日まで，2次にわたり，慶尚南道義昌郡東面茶戸里一帯に所在する原三国時代初期の墳墓遺跡(茶戸里遺跡)の発掘調査を実施した。茶戸里遺跡一帯は，すでに数度の分布調査で，伽倻古墳の密集地域として学界に周知されていたが，最近になって盗掘の恣行が甚しく，遺跡は殆んど湮滅状態におかれるに至った。国立晋州博物館の報告で被害状況の内容に接した中央博物館では，直ちに現地を踏査し，同地域が伽倻古墳群のみならず，また原三国時代初期の古墳密集地域であることを確認すると共に，遺構内容を把握するため，盗掘を被むった古墳中の一基を選んで緊急発掘調査を行い，引き続いて本一帯に対する全面的な調査に着手することになった。

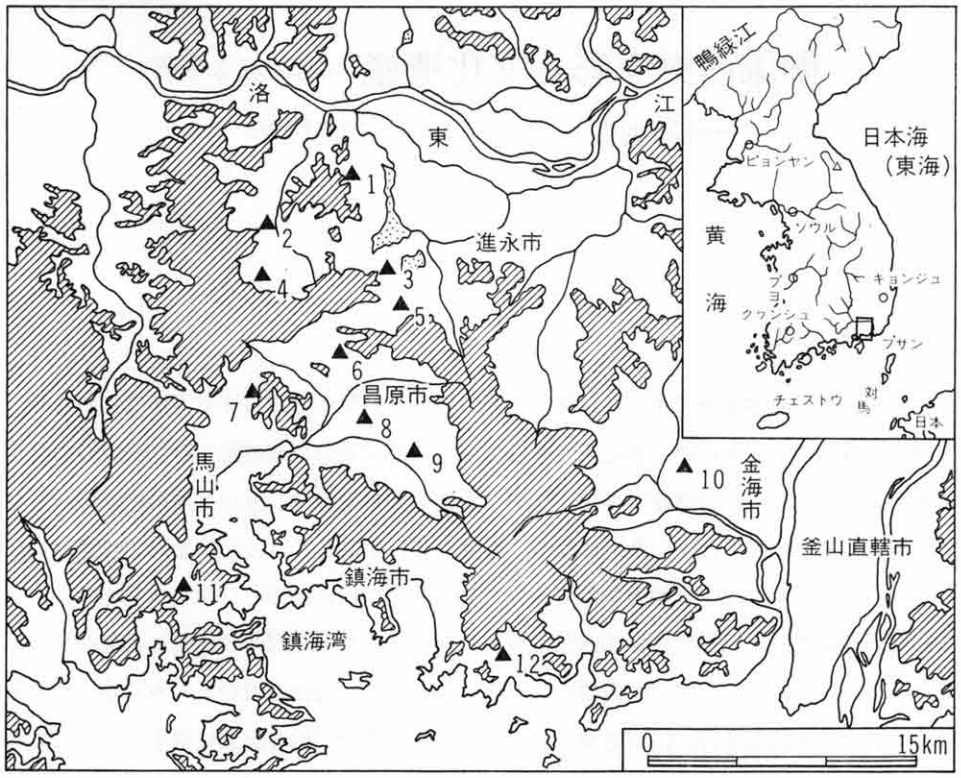
2. 遺跡の現況

遺跡が位置する茶戸里の田畑一帯は，元来，海抜約20mの低い野山から北側へ張り出した丘陵が存したが，現在は果樹園の階段式田畑に開墾されている。周辺には渡り鳥飛来地で有名なヂュナム貯水池とトンパン(東坂)貯水池(本来は自然湖)があり，洛東江が北側を東西に流れる。

遺跡の範囲は，上記した野山から延びた低い丘陵の稜線に沿った，長さ150m以上，幅30～40mである。遺跡の大部分が盗掘され，凹地が蜂の巣状に開いており，確認しただけでも100余基を数える。原三国時代の最大の墳墓遺跡と考えられる。野山の頂部には伽倻時代の古墳が，背後斜面には原三国時代後期の古墳が分布している。

3. 遺　　構

2次にわたり調査された墳墓は計14基で，1基以外は全て原三国時代初期に属し，甕棺墓2基及び木棺墓2基の他は，すべて盗掘されてはいたが，木棺墓と推定される。遺構の掘形は，表土である耕土直下の黄白色腐蝕岩盤層の地山か，あるいは黒色混り濃褐色腐蝕



茶戸里遺跡と周辺主要遺跡位置図

1：鳳谷里石棺墓　2：東田里石棺墓　3：**茶戸里遺跡**　4：外甘里支石墓
5：龍岑里支石墓　6：道溪洞古墳群　7：亀岩洞石棺墓　8：三東洞遺跡
9：外洞城山貝塚　10：七山洞古墳群　11：縣洞石棺墓　12：熊川貝塚

岩盤の地山層から検出された。調査を行った墳墓は木棺墓と甕棺墓に大別でき，木棺墓はさらに3類型に分けられる。第Ⅰ類型は墓壙底面中央に長方形の棺外副葬坑を設けた特殊な形態で，第Ⅱ類型は第Ⅰ類型と同様ではあるが副葬坑が見られず，第Ⅲ類型は規模が小さく墓壙が浅い。

〔木棺墓〕

第Ⅰ類型：1号・2号・11号墳が本類型に属する。大概，墓壙の大きさは，長さ2.8m・幅1m・深さ1.7m以上である。墓壙底面中央部に穿たれた長方形の副葬坑は，長さ70～80cm・幅50～60cmである。副葬品が比較的多い。

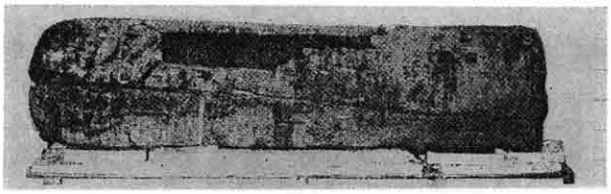
第Ⅱ類型：3号・4号・6号・8号・10号・13号墳がこれに属する。大概，墓壙の規模が長さ2.6m未満・幅1m未満で，深さは第Ⅰ類型と相似するか若干浅いかである。副葬坑は見られない。

第Ⅲ類型：9号・12号墳がこれに属する。墓壙の規模が長さ1.7～2.0m・幅0.5～0.7m・深さ0.3～0.4m位で，小さい。副葬坑は見られず，副葬品も極めて少なく土器2～3

点にすぎない。

これら木棺墓の多くは，木棺それ自体は確認できなかったが，土壙墓または土壙木棺墓と呼ばれるものである。もちろん，この時期に木棺以外に簡単な木蓋のみで被われた土壙墓も存在していたであろうと考えられるが，上記３類型はすべて木棺が使用されていたものと推測される。木棺が出土した１号墳と木棺の底部棺材のみ出土した２号墳から観て，第Ⅰ類型は確実に木棺墓であることは明らかであり，６号墳と12号墳の墓壙埋土の断面底部側でもＵ字形の明確な輪郭が認められ，第Ⅱ・第Ⅲ類型もやはり半截刳抜木棺を使用していたことが確実視される。特に構造が鮮明な１号墳を通して木棺墓の構造を調べてみれば，以下のようである。

まず土壙を深く掘った後(第Ⅲ類型除外)，底部中央に長方形の副葬坑を設けて副葬品を入れた竹篭を埋納し(第Ⅱ類型除外)，その上に木棺を安置して墓壙の４壁と木棺との間隙に副葬品を納め，その上部側を掘り出した土で埋め戻して充塡した。封土は残存していなかったため不明であるが，墓壙上に木蓋を被せて封土していたと推定される。このような構造であっても，墓壙底部中央部に小さな副葬坑を設置したり，木棺と墓壙壁との間隙に副葬品を入れて(棺外副葬)土を被せたりした点は，他の諸遺跡では見られない特異さである。１号墳の木棺は，残存状態が極めて良好で，原形をそのままに止めている。長さ約230cm・幅75cm・高さ70cm位の大きさで，直径1m程度の大きな丸木を切り出し，縦位に半截した後，内側を飼葉桶状に刳り抜き，各々を棺の蓋と身に使用していた。蓋と身の両端には各々穴を穿って木製楔を底部側から差し込み，蓋が開かないように工夫されている。棺材は阿部槙または櫟で，チョウセンブナ科に属する。



１号墳出土半截刳抜木棺（『中央日報』より）

木棺墓から出土した遺物は人工遺物と自然遺物とに二分でき，人工遺物はさらに武具類・農工具類・容器類・装身具類・その他に区分できる。人工遺物中，武具類には漆塗木製鞘に納められたままの完形銅剣・鉄剣・鉄製刀子をはじめ，銅鉾・鉄鉾・漆塗弓・棍棒・漆塗礼甲など，農工具類には木製柄付鉄製鍬・板状鉄斧・鑿斧など，容器類には，無文土器壺・瓦質土器短頸壺・高杯などの土器と，木心漆塗りの，高杯(図版第2-1)・四足付椀・筒形容器・有蓋椀など，装身具類にはガラス玉(首飾り？)・銅鏡・琴形帯鉤などがあり，その他の遺物としては小銅鐸・五銖銭・漆塗柄筆・竹で作った篭・麻で撚った紐及び綱などがある。自然遺物としては栗・木の葉・種不詳の果実・種子などがある。

これらの遺物のうち，漆塗鞘と銅鉾・鉄鉾・五銖銭・銅鏡・帯鉤・小銅鐸・柄筆などはすべて1号墳の副葬坑から竹篭に包まれた状態で発見された。1号墳の場合，盗掘の被害を被った木棺内部からは漆塗銅剣柄の盤部(剣把頭飾の下部装飾)・ガラス玉・種子・木製椀・板状鉄斧などが出土し，そのほかの副葬品はすべて棺外副葬品である。

〔甕棺墓〕

甕棺墓は計2基が調査されたが，1基は，楕円形の土壙を掘った後，無文土器の牛角形把手付甕(三角状口縁)2点からなる組合式甕棺を横置したものである。特異なことは，通例の合口式甕棺のように，口縁部を相対合せしたり挿入したものではなく，口縁部内にもう一つの甕の底部を嵌め込んで作った点である。他の1基は6号墳の真横から出土したが，単甕で，横置されていた。断面三角状口縁の無文土器で，6号墳に陪葬されたものと考えられる。しかし墓壙の掘形が明瞭でなく，単甕でもあり，慶尚北道慶州市・朝陽洞5号墳(訳注1)では木棺墓の土壙真横から副葬用の土器が出土しているので，この土器が甕棺ではなくて，6号墳の副葬用土器であった可能性もある。甕棺であるか否かについては，土器内・外部の土を採取したので，燐量を測定して検討してみたいと考えている。

4. 出土遺物

前述したように，盗掘による破壊で本遺跡から出土した遺物の量は，1号墳を除いては極めて少ない。遺物中，土器類は大部分が後期無文土器または瓦質土器で，底部が平底の古式短頸壺である。

土器の表面に漆塗りされているものも見られる。

土器類は整理が完了していないために明確ではないが，打捺文が施された土器は認められない。無文土器としては最終段階のものであり，所謂瓦質土器としては初期段階のものと推量される。

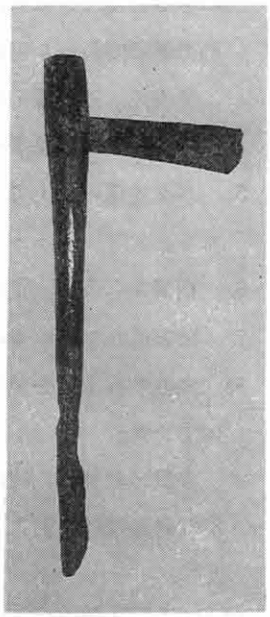
漆器類は，今日までに黄海北道瑞興・泉谷里石槨墓(訳注2)，忠清南道牙山・南城里石棺墓(訳注3)，全羅南道咸平・草浦里遺跡(訳注4)などから破片や小片が発見されたことがあり，青銅器時代から製作されていたことは知られていた。

しかし漆がどのような遺物に使用されていたのか，また周辺地域の漆器類とはどのような関係にあったのかは，不明であった。茶戸里遺跡では第Ⅰ・Ⅱ類型の木棺墓から殆んどすべての漆器類が出土し，容器類・武具類と柄筆に到るまで，その種類において多様さを示している。容器類をはじめとして殆んどすべての漆塗り製品は黒漆から成っており，木心漆器が主をなしている。籃胎・陶胎もみられ，木胎は，素手で削り出したものや，ロクロ削りしたもの，板を組み合せたものなど，製作技法も多様である。中国の漢代の漆製品

とは多くの点で差異を見せており，漢代漆製品の商標のようになっている耳杯がなく，朱漆で描かれた文様もなく(訳注5)，容器類の器形も漢代の漆製品では見られない。このような漆器は，むしろ無文土器中，中・南部地域の黒色土器類の器形と類似しており，南部地域の漆器文化が極めて独創的で，韓国式銅剣文化の伝統下で成立したものであることは明らかである。しかしこの時期に，漢または楽浪の漆器と伝統は異なってはいるが，種々の面で影響を受けたであろうことは考えられる。

漆製品中，黒漆塗鞘銅剣及び鉄剣の鞘は完形ではないが，西北地方の平壌市楽浪区域貞柏洞(訳注6)及び石巖里第219号墓(訳注7)から出土したことがある。このような鞘の形態は中国では見られない独特のもので，銅剣から観ても韓国式銅剣文化の所産であることは間違いない。また1号・11号墳から出土した漆塗弓は帆桁に樹皮を巻いて漆塗りしたもので，彎弓ではなく，直弓(長さ約170cm)である点が注目される。我国では最初の出土例である。

このほかに，板状鉄斧をはじめとした各種鉄製品，特に農工具の存在はこの時期にすでに鉄製品が普遍化していたことを物語っていると言えよう。板状鉄斧は木棺の左右壁に柄を装着せずに数点副葬されていたが，刃部が鈍い形式的なものもあり，これが単なる斧ではなく，鉄鋌のような地金の役割も果していたものと推量される。


木製柄付鉄斧

ガラス玉は，1号墳の木棺内部からのみ発見されたが，すべて藍色の小玉で，糸を通せる位の小さな穴が穿孔されている。このようなガラス玉は慶州市・朝陽洞38号墓(訳注8)，平壌市・貞柏洞53号墳(訳注9)などからも発見されており，すでにこの時期に各地で直接ガラスを少量ではあるが製作していたものと考えられる。ガラス玉の製作が鉄製品の製作過程から付随的に得られるものではないかと思われる。

1号墳の竹篭内から出土した前漢代の星雲鏡と五銖銭は，この遺跡の年代推定に絶対的な根拠を提供する一方，当時の漢・楽浪などとの交渉関係を把握できる好資料と言えよう。星雲鏡は西漢中期(武帝～昭帝)に盛行した形式である。我国では西北地方の平壌市楽浪区域・土城洞4号墳(訳注10)及び貞柏洞3号墳(周古墓(訳注11))から出土したことがあり，貞柏洞3号墳では西漢後期に盛行した昭明鏡と共伴していた。このことは，この古墳が，おおよそ紀元前1世紀後半に属することを示していると言えよう。

一方五銖銭は計3点出土したが，その内1点は所謂穿上横文銭である(訳注12)。穿上横文の例は，

紀年銘銭笵との比較から，大概，元鳳6年(B.C.75年)と建昭5年(B.C.34年)間の銭笵で見ることができ，東漢代の紀年銘銭笵では現在まで散見できない。また「五銖」の字体から推しても，これら五銖銭が西漢代のものであることは確実である。従って茶戸里1号墳の年代は，同遺物が副葬されるまでの期間を勘案するとしても，紀元前1世紀後半には比定できるものと考えられ，他の墳墓も近接した時期に造営されたと推量される。

5. おわりに

以上の調査内容を通して，以下の点が指摘できよう。

1. この古墳群は，原三国時代初期に造営された集団埋葬墓域である可能性が高い。
2. 嶺南地域の初期原三国文化は韓国式銅剣文化の伝統を忠実に継承している。
3. 1号墳出土の多種多様の副葬品は，他の古墳のものと比較してみると，階級差を認めざるを得ないほど，懸隔な差違を見せており，1号墳の被葬者は君長のような政治的指導者であった可能性がある。
4. 前漢鏡・五銖銭・琴形帯鉤・小銅鐸など，漢の遺物と見做すと，楽浪及び漢との密接な関係を垣間見ることができる。
5. ガラス玉の出土で，小形のガラス製品は，紀元前1世紀頃から製作されていたと言える。
6. 柄筆からみて，上流階級では筆墨文化がこの時期に存在していた可能性が高い。
7. 独創的かつ高水準の漆器文化をもっていた。
8. 半截刳抜木棺を使用した独特な墓制が確認されたこと(訳注13)で，遺跡の地域的性格を明確にできた。
9. 多量の鉄製品，特に鉄製農工具の存在から観て，すでにこの時期に南部地方は本格的な鉄器時代に突入していた。

以上から，原三国時代または三韓時代初期に，この地域に相当な政治勢力が存在し，鉄生産を土台に楽浪・倭などと活発な交易を行っていたものと推量される。

遺物の保存処理対策で出土遺物を詳しく検討していないが，遺物の整理が十分に行われたならば，多くの新しい事実が明らかにされるものと期待される。

≪追記≫

3次調査の際，朱漆で描かれた文様のある円筒形漆器と剣鞘が出土した。文様は三角鋸歯文(内側に平行短斜線文がある)と線文で，同文様からみると，漢代漆器の文様とは異な

り，青銅器文化の伝統が継承されていることが分る。

（李　健茂＝韓國國立中央博物館考古部學藝研究官）
（訳・松井忠春＝当センター調査第１課資料係主任調査員）

≪訳者付記≫　本報文は，『博物館新聞』第202号(1988年６月１日付)に掲載されたものである。武寧王陵発見以来と言われる驚嘆すべき調査内容が昨年４月９日付で韓国の各報道機関に公表され，日本でもその報道内容が４月14日付で取り上げられた。その後の継続調査でも厖大な重要成果が得られていると聞いている。この報に接した訳者は，今後の古代日韓関係史研究にも重大な影響を及ぼすものであると考え，昨年末に訪日・上洛された調査責任者でもある李健茂先生に本原文の訳出をお願いしたところ快諾され，その後訳稿を校閲して頂き，未報告写真まで送付賜った。李先生に深謝すると共に，種々お世話下さった韓国国立中央博物館並びに同館学芸官徐五善氏に対し謝意を表します。

訳注１　慶州博物館学芸研究室「慶州朝陽洞古墳発掘概報」(『博物館新聞』第96号，ソウル，1979)。
崔　鍾圭「慶州朝陽洞古墳群二次調査発掘概報」(『博物館新聞』第100号，ソウル，1980)。
韓　炳三「慶州朝陽洞古墳発掘の意義」(『韓国考古学年報』７，ソウル，1980)。
崔　鍾圭「慶州朝陽洞土壙墓群四次発掘概報」(『韓国考古学年報』９，ソウル，1982)。
崔　鍾圭「朝陽洞土壙墓群４次発掘」(『博物館新聞』第126号，ソウル，1982)。
崔　鍾圭・定森秀夫訳「慶州市朝陽洞遺跡発掘調査概要とその成果」(『古代文化』第35巻第８号，京都，1983)。

訳注２　白　鍊行「瑞興郡泉谷里石槨墓」(『考古民俗』1966年第１号，平壌，1966)。

訳注３　韓　炳三・李　健茂『南城里石棺墓』(『國立博物館古蹟調査報告』第10冊，ソウル，1977)。

訳注４　李　健茂・徐　聲勲『咸平草浦里遺跡』(國立光州博物館・全羅南道咸平郡編『國立光州博物館學術叢書』第14冊，光州，1988)。

訳注５　≪追記≫参照。

訳注６　李　淳鎮「≪夫租蔵君≫墓について」(『考古民俗』1964年第４号，平壌，1964)。
永島暉臣慎・西谷　正共訳「『夫租蔵君』墓について」(『考古学研究』第14巻第４号，岡山，1968)。
社会科学院考古学研究所『古朝鮮問題研究論文集』(平壌，1977)。

訳注７　榧本亀次郎「王根墓調査報告」(『美術資料』第４輯，ソウル，1961)。

訳注８　訳注１に同じ。

訳注９　社会科学院考古学研究所編『考古学資料集』第５集（平壌，1978)。

訳注10　キム　チョンヒョク「土城洞第４号墳発掘報告」(『考古学資料集』第４集，平壌，1974)。

訳注11　社会科学院考古学研究所編『考古学資料集』第６集（平壌，1983)。

訳注12　岡内三真「漢代五銖銭の研究」(『朝鮮学報』第102輯，天理，1982)。

訳注13　今回検出された半截刳抜木棺は，日本の古墳時代前期に通例の割竹形木棺を考究する上で極めて重要な意味を有していると考える。

昭和63年度発掘調査略報

9. 日 光 寺 遺 跡

所 在 地　熊野郡久美浜町大字浦明小字日光寺

調査期間　昭和63年７月21日～平成元年１月21日

調査面積　約2,200㎡

はじめに　日光寺遺跡の調査は，一般国道178号の道路新設改良事業に伴う事前調査である。日光寺遺跡は久美浜湾に臨む標高15m前後の海岸段丘上にあり，隣接する段丘上には，情報30号で紹介した鳥取城跡や弥生時代の竪穴式住居跡を検出した浦明遺跡がある。

調査概要　調査はＡ・Ｂ・Ｃの３つの調査区に分けて行った。

①Ａ調査区　Ａ調査区では７世紀末を前後する時期の掘立柱建物跡１棟（５間×２間の南北棟）をはじめ弥生時代から平安時代までの多数のピット，土坑，中世墓等を検出した。中世墓は，長径約180cm・短径約45cmの長楕円形を呈する同形同大の２基が，南北方向を主軸として並列して検出された。このうち東側の１基には，北寄りに完形の青磁椀１個体が副葬されており，北枕での埋葬が推定される。これらは鎌倉時代の夫婦墓であろう。

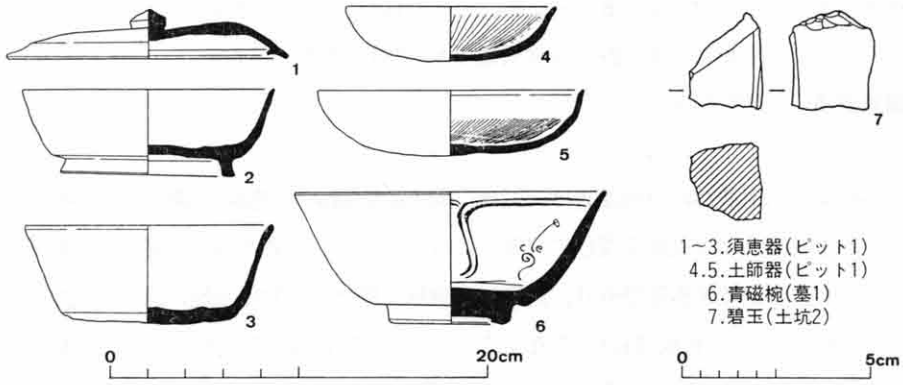
②Ｂ調査区　Ｂ調査区では竪穴式住居跡，掘立柱建物跡，土坑，中世墓等を検出した。竪穴式住居跡は合計６棟検出したが，このうち最も残りのよいSH3は，一辺約6.1mの隅丸方形を呈し，周壁溝には壁面に板材などを固定するために打った杭跡とみられる小ピットが検出された。またSH3の床面で検出された一辺約4.4mの方形に巡る小溝にも同様の小ピットが検出され，この住居跡が，壁面を掘り拡げることによって四周に拡張されていることが判明した。なお，この拡張によっても主柱穴の位置は動いていない。この他，Ａ調査区と同様，南北方向を主軸とする掘立柱建物跡が数棟検出されている。

③Ｃ調査区　Ｃ調査区ではＡ・Ｂ調査区にはない良好な遺物包含層が存在し，本調査は来年度に行うこととなった。

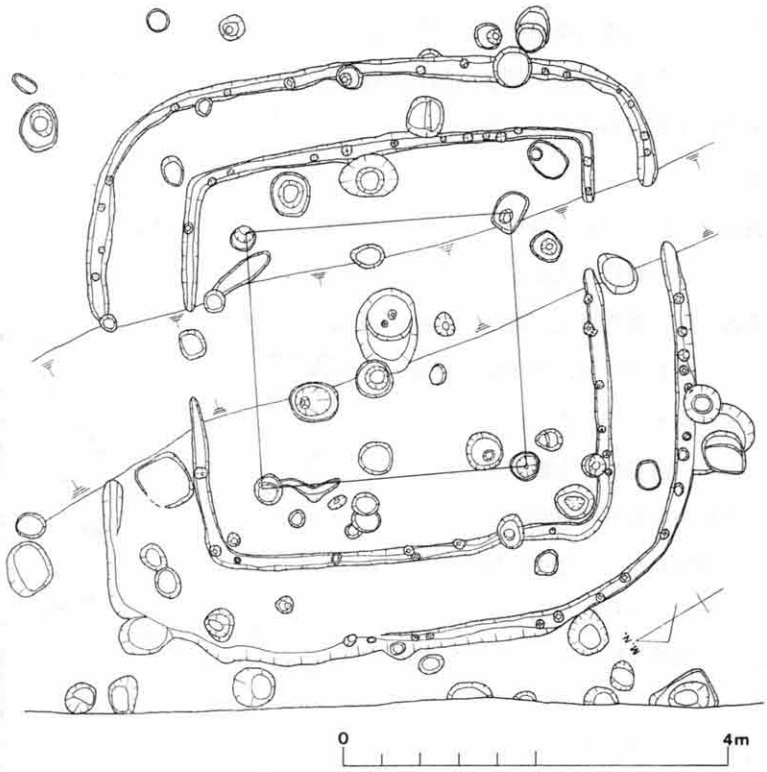
第１図　調査地位置図（1/50,000）

まとめ　今回の調査の結果，当遺跡は弥生時代～鎌倉時代にわたる複合遺跡であることが判明した。今後の整理作業によって遺跡の各時期ごとの変遷を明らかにしたい。

（森島康雄）



第2図　A調査区出土遺物実測図



第3図　B調査区竪穴式住居跡(SH3)平面図

10. 三　宅　遺　跡

所 在 地　綾部市豊里町三宅ほか

調査期間　昭和62年5月8日～昭和63年3月11日(第1次調査)
昭和63年4月21日～平成元年1月25日(第2次調査)

調査面積　約8,500㎡

はじめに　三宅遺跡の発掘調査は，近畿自動車道舞鶴線(近舞線)建設に伴う事前調査であり，日本道路公団の依頼を受けて実施したものである。三宅遺跡は，綾部市豊里町三宅地区を中心に広がる集落跡であり，由良川中流域に開けた福知山盆地の北，南流する犀川左岸の低位段丘上(海抜約35m)に存在する。この段丘部には三宅遺跡の北に館遺跡，南に長砂遺跡の2遺跡(弥生時代)と三宅古墳群が近接して存在する。

調査対象地は，段丘上を横断する東西約150m・南北約70mの範囲であり，東部の水田面と西部の畑地部(微高地)では，約1mの比高差を測る。この畑地部分には，三宅4号墳(円墳)が存在する。調査対象地内には，第Ⅰ調査区～第Ⅵ調査区を設け，第1次調査では，南部地区の第Ⅰ・第Ⅱ(南部)・第Ⅲ・第Ⅴ調査区の調査を実施した。第2次調査では，第Ⅱ(北部)・第Ⅳ・第Ⅵ調査区を調査した。

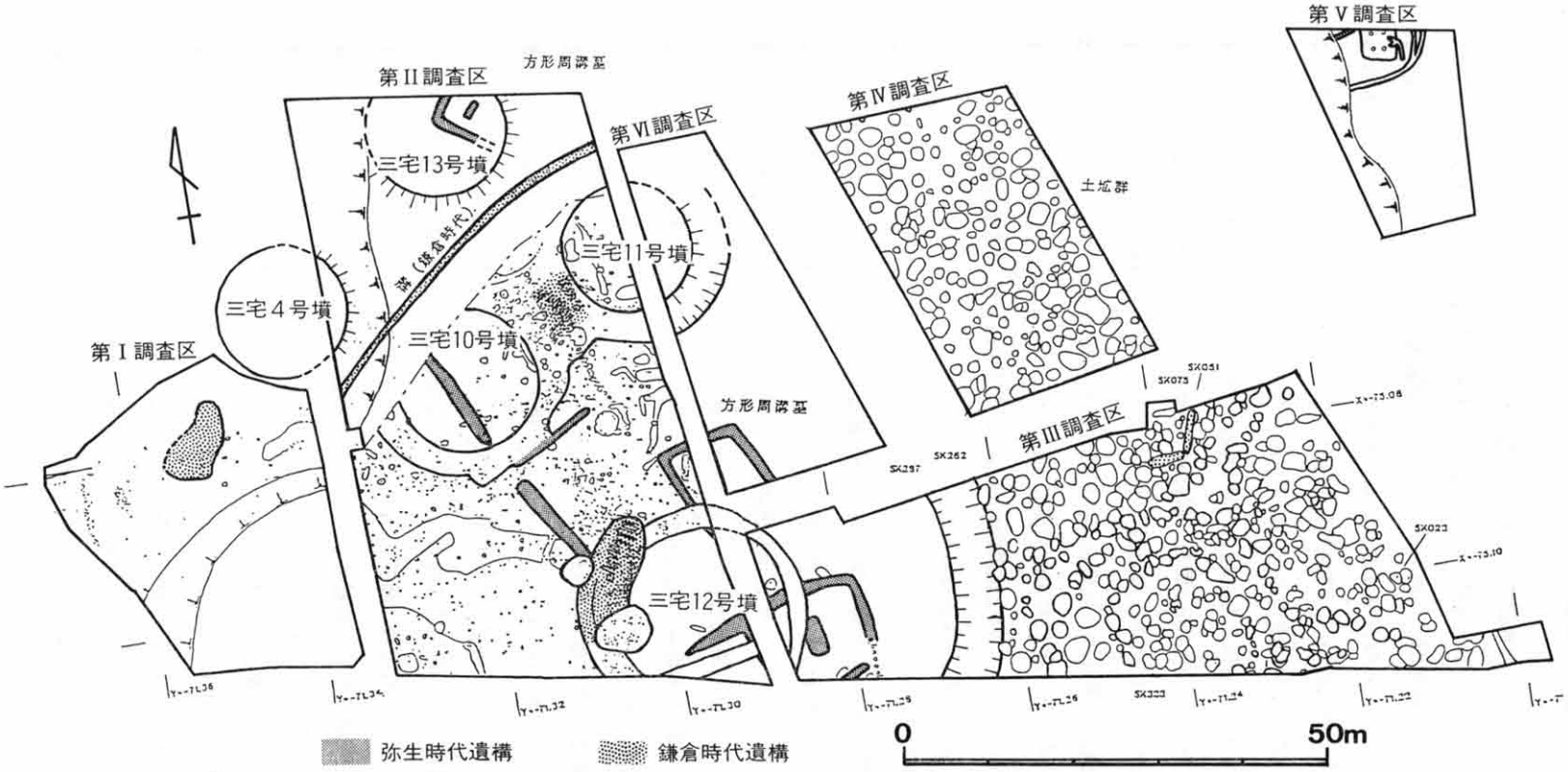
調査概要

第Ⅰ調査区　段丘西端の下段テラスに設けた調査区である。調査区内は2段に分かれ，北部テラス(下段)に鎌倉時代の浅い不定形土坑を検出した。

第Ⅱ調査区　段丘微高地上に設けた調査区である。この調査区では，弥生時代～鎌倉時代の遺構を検出した。弥生時代に属する遺構は，方形周溝墓に伴う埋葬主体部と溝である。埋葬主体部内に遺物は認められなかったが，溝内から一括性のある土器(壺・水差し)の出土を見た。出土した土器は，いずれも畿内第Ⅳ様式に属するものであった。

第1図　調査地位置図 (1/25,000)

古墳時代に属する遺構として，円形に巡る幅約2.6～4m・深さ約40cm前後の溝を4


第Ⅰ調査区
第Ⅱ調査区
第Ⅲ調査区
第Ⅳ調査区
第Ⅴ調査区
第Ⅵ調査区
方形周溝墓
三宅13号墳
三宅11号墳
三宅4号墳
三宅10号墳
三宅12号墳
土坑群
弥生時代遺構
鎌倉時代遺構
0
50m

第2図　調　査　地　平　面　図

条検出した。これらの溝は古墳に伴う周溝と考えられ，調査区内に4基の円墳(三宅10～13号墳)が存在することが判明した。検出した4基の古墳はすでにマウンドと埋葬主体部を消失しており，基底部と周溝を確認した。古墳基底部には弥生時代の方形周溝墓が存在することから，これらの古墳は盛土により築かれていたことが判明した。周溝内から出土した須恵器等の年代観から，古墳の築造年代は6世紀代とみられる。また，特異な遺物として三宅13号墳の東側周溝内から，鏡形土製品等の祭祀遺物が出土している。

古墳時代以降の遺構としては，古墳周溝内に存在した畝状遺構がある。周溝内底部に幅約40cm・長さ約3.5～4mの溝を，横に30～40cmの間隔で連続して十数本配している。溝底から鎌倉時代に比定される土器が出土したが，遺構の性格は現在のところ不明である。

第III調査区　第II調査区東側の水田部に設けた調査区である。調査区西部では，弥生時代の方形周溝墓と三宅12号墳の周溝を検出した。一方，調査区東部では，336基にのぼる土坑群を検出した。この土坑群の西端には，幅約6mの浅い溝状遺構が南北に走り，溝の西側では土坑群の存在は認められない。

土坑の平面プランは，円形・楕円形・方形を呈し，小さいもので0.6m・最大のもので3.4mの規模を測る。土坑の深さは40～90cmとまちまちであり，土坑底の形状も不整形なままで終わる例が多い。土坑内の埋土は地山と同様に粘土質であったが，色調にはいくつかの変化が認められた。それらの色調は，黒色系・暗灰色系・暗茶褐色系に大別できた。

土坑内からの出土遺物として，土器・板状木製品の出土を見ている。土器は，古式土師器(庄内併行期)が多数を占めるが，極めて少量ながら一部の土坑内から瓦器椀が出土している。須恵器の出土はみられない。

第IV調査区　第III調査区の北に設けた調査区である。第III調査区と同様，多数の土坑群を検出し，その数は185基にのぼった。土坑群の内容は，第III調査区検出の土坑群と大差ないが，出土した土器の中には布留式併行期に属するものもみられた。

第V調査区　この調査区は調査対象地の北東端，以久田野丘陵の西裾部に位置する。調査区の北端部で，古墳時代後期の竪穴式住居跡1基を検出した。住居跡は，一辺が4.2～5mの方形住居跡であり，東壁中央に造り付けの竈を持つ。この竈には，住居東壁に沿って南にのびる煙道が存在する。この住居跡の周囲には，排水溝とみられる深い溝が切られていた。その他の遺構としては，弥生時代後期の溝を検出している。

第VI調査区　第II調査区の東に設けた調査区である。この調査区では，第II調査区から続く方形周溝墓と三宅11号墳の周溝を検出している。

まとめ　今回の三宅遺跡の発掘調査では，弥生時代中期から鎌倉時代にかけての遺構の検出をみた。調査前の課題は，現在に残る「三宅」の小字名から，「屯倉」に関連する遺

構の検出であった。しかし，約8,500m²の調査区内には，それらしき遺構が認められなかった。

弥生時代の様相は，調査地の中でも高所に設けた第Ⅱ・第Ⅴ調査区検出遺構から窺える。第Ⅱ調査区で検出した方形周溝墓群は，畿内第Ⅳ様式の土器を伴うことから，中期末にはこの段丘上の微高地が，墓域であったことが判明した。後期段階では，第Ⅴ調査区で小規模な溝を検出している。住居跡等の集落中心施設は未検出であるが，第Ⅴ調査区の北には段丘が広がり，館遺跡(弥生時代中期)が近接して存在する。館遺跡を中心とする集落の墓地が，第Ⅱ調査区の方形周溝墓群とみることもできよう。

古墳時代に至り，低地に設けた第Ⅲ・第Ⅳ調査区から初頭段階の土坑(521基)を検出した。この土坑群は，以久田野丘陵裾部周辺に集中し，溝状遺構を境に西側の段丘端部にまで及ぶことはない。土坑群の構成としては，調査地南部に土坑の群集が認められる。土坑の形態・規模はさまざまであるが，第Ⅲ調査区南部と東部の2か所に中心部が見られ，それぞれリング状に周囲に広がる土坑の配置が読み取れる。土坑内埋土中には土器(甕)が含まれる割合が高く，完形品に近いものも多数存在する。この土坑群の性格等に関して，現時点では不確定要素が多いが，土壙墓[注1]か粘土採掘坑と考えられよう。

その他，第Ⅱ調査区から三宅古墳群に伴う古墳周溝を多数検出した。今回検出した10号墳～13号墳の埋葬施設は不明であるが，首長墳とみられる三宅1号墳(荒神塚古墳)と同様，粘土槨主体部の可能性がある。荒神塚古墳は，2基の粘土槨主体を持ち，鏡(内行花文鏡)・短甲・馬具その他の鉄製品，土師器・須恵器等の副葬品からみて，被葬者は当地の有力者であったと推察される。三宅古墳群は，ほぼ6世紀代の円墳群であり，存在が推定される「屯倉」と関わりのある古墳群とみられる。

古墳時代以降の遺構・遺物は少ないが，第Ⅱ調査区で検出した溝状遺構は，鎌倉時代の道路の側溝とみられる。古墳墳丘基底部の遺構に中世遺物が含まれるところから，三宅古墳群のうち，多くの古墳は鎌倉時代以降早い段階で削平を受けたとみられる。

三宅遺跡の調査では，各時期に属する豊富な遺構・遺物を検出している。なかでも，弥生末～古墳時代初頭の土坑群の検出は，群を抜くものである。現在，整理作業を開始した段階であり，今後整理作業を進めることにより，この土坑群の性格を明らかにしたい。

(竹原一彦)

注1　類例として，大阪府の高槻市狐塚古墳群(約600基)，堺市菱木下・万崎池遺跡(約1,000基)，富田林市新家遺跡(約400基)，寝屋川市讃良郡条里遺跡(約350基)等で古墳時代後期の群集土壙墓群が検出されている。

11. 青野西遺跡第4次

所在地　綾部市青野町上フケ

調査期間　昭和63年5月20日～10月22日

調査面積　1,500㎡

はじめに　今回の調査は，中丹広域農道建設工事に伴うもので，京都府中丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

青野西遺跡は，由良川中流域の代表的な集落遺跡として知られる青野遺跡の西側に位置する。今回の調査地は，青野西遺跡のうちでも北端部付近にあたる。

第1図　調査地位置図（1/25,000）

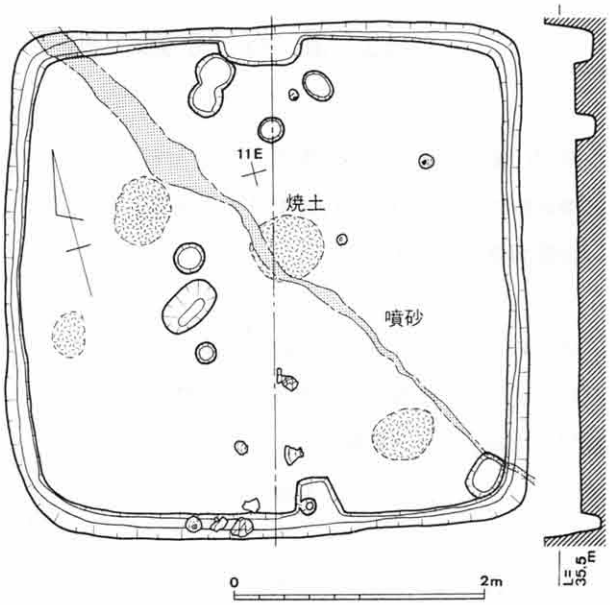
青野西遺跡では，これまで3次にわたる調査が行われている。第1次の調査地は，今回の調査地の北側に隣接しており，弥生時代末から古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡や平安時代の溝などが検出されている。第2・3次の調査地は，今回の調査地の南西側約130mに位置し，古墳時代初期から前期にかけての竪穴式住居跡や前方後方形の周溝をもつ墳墓などが検出されている。

調査概要　今回の調査で検出した遺構は，竪穴式住居跡3基・掘立柱建物跡2棟・溝状遺構4条などである。また，建物としてはまとまらないが，柱穴とみられるピットを多数検出している。時期的には，古墳時代初期から前期にかけてのものと，平安時代のものとの二時期に分かれる。また，地震によってできた噴砂の跡も検出した。

(1) 古墳時代初期から前期の遺構

この時期の遺構としては，竪穴式住居跡3基と溝状遺構2条がある。竪穴式住居跡は，方形のものが2基と円形のものが1基である。方形のものは，一辺約4.8mのものと一辺約4mのものであり，ともに周壁溝をもつ。また，方形の掘形の底部をさらに円形に掘り込んだ，特殊ピットをもつ。出土遺物からみて，畿内布留式併行期とみられる。円形のものは，部分的に検出したのみであり，直径などは不明である。周壁溝をもつ。明確な伴出遺物はなく，時期判定は困難であるが，第1次調査の結果からみて，方形のものに先行するものとみられる。

溝状遺構は，やや蛇行気味に調査地内を東西に横切っている。そのうちの１条は，幅約3.2m・深さ約1.2mを測る。もう１条は幅約1.1m・深さ約30cmである。前者の底部からは，庄内式併行期の土器が出土しており，上層からは布留式併行期の土器が出土している。後者は，前者の南側に平行しており，布留式併行期の土器が出土している。層序観察によると，前者が埋まった後，後者が設けられている。



第２図　竪穴式住居跡実測図

(2) 平安時代の遺構

この時期の遺構としては，掘立柱建物跡２棟と溝状遺構２条がある。掘立柱建物のうちの１棟は，３間×２間の南北棟の建物である。柱間は，南北方向が約3m・東西方向が約2.4mで，全体の規模は，約9m×約4.8mとなる。柱穴内から，糸切り高台の土師器椀が出土した。もう１棟は，１間×３間の東西棟の建物である。柱間は，南北方向が約3.6m・東西方向が約1.8mで，全体の規模は約3.6m×約4.8mとなる。

２条の溝状遺構は，調査地東側を，平行して南北に縦断している。そのうちの１条は，幅約1m・深さ約40cmで，その東側に平行するもう１条は，幅約1m・深さ約60cmである。前者が後者に先行しており，後者から，糸切り高台の土師器椀・黒色土器椀・鉄滓付着のふいご羽口などが出土した。なお，第１次調査でも，これらの北側延長部を検出している。

まとめ　今回検出した古墳時代の竪穴式住居跡は，位置的・時期的にみて，第１次調査で検出された竪穴式住居跡と同じ集落に属するものとみられる。また，この時期に属する溝状遺構も，この集落と何らかの関係を有するものであろう。

平安時代の掘立柱建物跡と溝状遺構も，方位がほぼ同じであり，そのあり方には，何らかの規格性も想定される。

噴砂は，古墳時代前期の竪穴式住居跡を切っており，平安時代のものとみられるピットが噴砂内に切り込んでいる。したがって，この間の地震によって形成されたものとみられる。噴砂の幅は一定しないが，広いところでは，約55cmを測る。　（引原茂治）

12. 北谷城跡・西八田城跡

所 在 地　綾部市淵垣町北谷(北谷城跡)・岡安町(西八田城跡)

調査期間　昭和63年11月1日～平成元年1月27日

調査面積　700㎡

はじめに　今回の調査は，綾部工業団地造成事業に伴う試掘調査であり，京都府企業局の依頼を受けて実施した。これらの城跡は，由良川の支流である八田川の西岸の丘陵上に位置する。

北谷城跡については，その大部分が緑地公園として保存活用される予定であり，開発予定の北側部分について，支丘陵頂部や小テラス状平坦地などを調査した。西八田城跡については，ほぼ全域が開発対象となっており，丘陵頂部や周辺の小テラス状平坦地について調査を行った。

第1図　調査地位置図 (1/25,000)

北谷城跡　北谷城跡では，4か所(1～4地区)について調査した。このうち，1・2・4地区では，遺構・遺物とも出土しなかった。

支丘陵端部にあたる3地区からは，土師器甕片・須恵器杯蓋片などが出土した。これらの土器は，6世紀末頃から7世紀初頭頃にかけてのものとみられる。付近に何らかの遺構が存在する可能性があるので，周辺を拡張して調査したが，遺構はなかった。遺物は，地形のくぼみ部分に堆積した状態である。地形からみて，かつては古墳などの遺跡があったものと考えられるが，すでに流出して残存していないものとみられる。

西八田城跡　西八田城跡では，丘陵頂部(1地区)と周辺の小テラス状平坦地2か所(2・3地区)について調査した。2・3地区については，遺構・遺物とも出土しなかった。

丘陵頂部の1地区は，城であれば本丸にあたる地点である。調査前の状況は，やや広い平坦地ではあるが，土塁などの施設は認められなかった。この頂部から尾根に沿ってほぼ西側約30mのところに，人工的な堀切とみられる部分があり，頂部からこの堀切までを調査することとした。

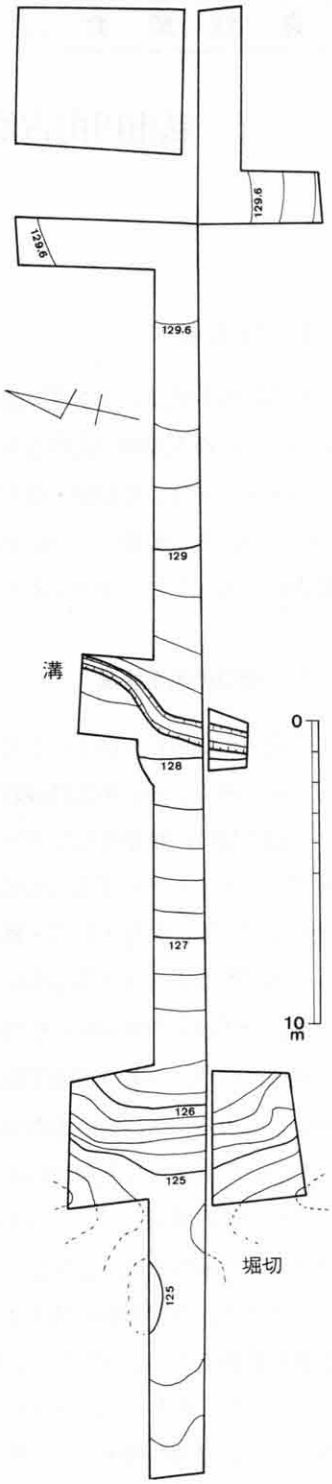
調査の結果，頂部の平坦地では，遺構・遺物は出土しなかった。頂部と堀切のほぼ中間で，蛇行して尾根を横切る溝を検出した。この溝は，幅50～80cm・深さ約30cmである。この溝に伴う出土遺物はない。

堀切は，層序観察によると，旧表土から約1.4mの深さまで掘り込まれ，東側肩部の旧表土上には層厚約40cmの盛土層が残存している。このような状況からみて，堀切の廃土を，東側に土塁状に盛り上げていたものとも推定できる。なお，この堀切周辺や盛土層中からは，遺物が出土していない。

まとめ　調査の概要は以上のとおりであるが，若干の留意点を列記してまとめとしたい。

北谷城跡については，八田川に面した南東側の丘陵頂部に，本丸とみられる，コ字状に土塁で囲まれた平坦地があり，その背後にあたる北側には，尾根の稜線を断ち切る，かなり深い堀切がある。また，その平坦地の南および南東側には，郭とみられる小平坦地が段々状に続く。このような状況からみて，北谷城跡の範囲は，その堀切部までであり，今回の調査地までは及んでいないものとみられる。今回の調査地内では，城跡に関係する遺構・遺物は検出していない。

西八田城跡については，本丸とみられる丘陵頂部付近で，溝と堀切を検出したものの，出土遺物がないため，それらの時期・性格については，不明である。このように，溝や堀切が城跡に伴う遺構と断定できないので，西八田城跡そのものについても，城跡であるか否かについては不明である。仮に城跡としても，調査地の状況からみて，今回検出した溝と堀切以外には，遺構は残存していないものとみられる。　（引原茂治）



第2図　西八田城跡1地区

資　料　紹　介

私市円山古墳出土の胡籙金具 〈図版第3参照〉

鍋　田　　勇・石　崎　善　久

1. はじめに

私市円山古墳は，京都府綾部市私市町円山に所在する。由良川中流域(綾部・福知山)においては，最大規模の古墳であり，古墳時代中期に築造された首長墓に位置づけられる。

当センターは，昭和62・63年度に，私市円山古墳の発掘調査を実施した。調査の概要については，先に掲載しているが(注1)，今回は，出土遺物の中でも，全国的に出土例の少ない胡籙金具を取り上げ，紹介することにしたい。

2. 遺物の出土状況

私市円山古墳から出土した胡籙金具は，吊手飾金具1対，コ字形飾金具2点である。また，同一地点から，帯金具(鉸具・方形金具)も出土している(第1・2図参照)。

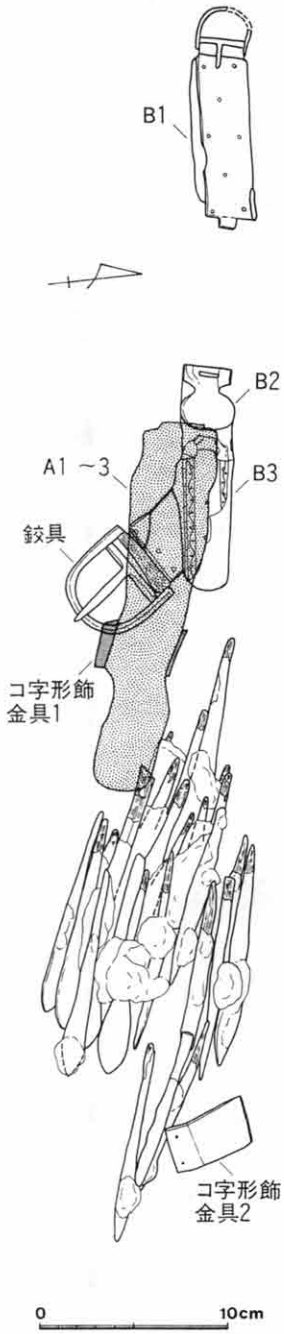
胡籙金具は，墳頂部にて検出した3基の主体部のうち，第1主体部と呼称する主体部の棺内から出土した。第1主体部は，初葬と考えられる第2主体部の北側に位置しており，胡籙金具の他，甲冑・鉄剣・鉄鏃・鏡・玉類・竪櫛等，豊富な副葬品が出土するなど，中心主体である第2主体部と比肩する内容をもつものである。

胡籙金具の出土位置は，棺内の南西隅で，鉄鏃群とともに検出された。鉄鏃は，切っ先を東側に向け，一束の状態で検出されたため，胡籙内に収められていたものと考えられるが，3点のみ，切っ先の方向を違え，やや離れた状態で出土している(図版第3参照)。

吊手飾金具は，吊手飾金具Aが吊手飾金具Bの上に重なって検出された。金具A・Bそれぞれの装飾面を向かい合わせた状態で出土している。吊手飾金具Bの部品B1は，やや西に離れた場所で検出された。コ字形飾金具1は，吊手飾金具Aの部品A2を挟み込むような状態で，コ字形飾金具2は，鉄鏃の切っ先付近から，検出されている。帯金具は，吊手飾金具Bのさらに下側から，装飾面を上にした状態で検出された。

以上の出土状況から，全体的に良好な遺存状態とはいえ，棺内において，棺や遺物の腐食に伴う2次的な移動があったことは否めない。これは，胡籙を副葬する際，先に埋納された草摺によってスペース的な制約を受け，棺側にもたれかけるような状態に置かれてい

たためではないかと推測される。



第1図　第1主体部
胡籙金具・鉄鏃等出土状況図

3.　遺物の観察

吊手飾金具およびコ字形飾金具の材質は，鉄地金銅張り，金具Ｂ１に付随する刺金付鉸具，帯金具(鉸具・方形金具)は，金銅製である。

吊手飾金具Ａ・Ｂとも，３つの部品から構成される。各部品の装飾面における文様は，蹴り彫りにより周縁に２条の直線文を施し，その間に波状列点文を配する極めてていねいなつくりと高い装飾性をもつものである。波の１単位の間隔には，若干の差異が認められる。

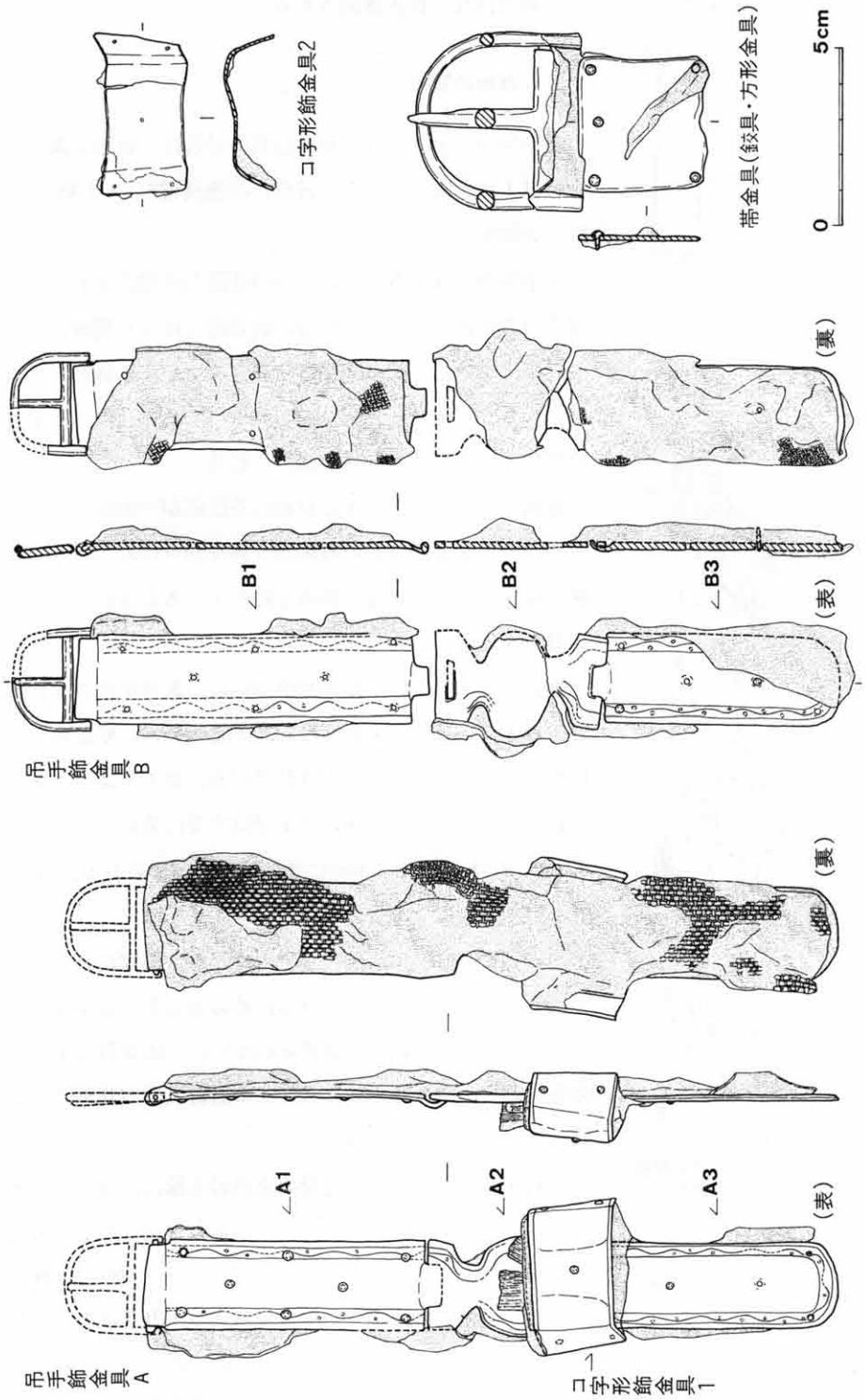
裏面には，布および革と思われる痕跡が一面に付着しており，金具Ｂ３では革の痕跡が金具を巻き込んだような状態になっている。布は，経糸と緯糸を一本おきに交差させて織る平織りである。

金具Ａ１・Ｂ１は，長方形の金具に，鉸具を取り付ける軸受けと，金具Ａ２・Ｂ２に接続するための，断面形が半円形の鈎状の部分が作り出されている。Ｂ１では，付属する鉸具が遺存していたが，Ａ１ではすでに失われていた。各々，周縁に６個，中央に２個の鋲が認められる。金具Ｂ１の方がＡ１より長い。

金具Ａ２・Ｂ２は，中円双方形を呈し，両端にＡ１，Ｂ１，Ａ３，Ｂ３の鈎手を受けるための長方形の孔が開けられている。また，鋲は，認められない。この金具にも，他の金具同様，蹴り彫りによる２条の直線文と波状列点文が施されている点が注意される。

金具Ａ３・Ｂ３は，長方形の金具の上端に，金具Ａ１・Ｂ１同様の断面形が半円形の鈎状の部分を作り出したもので，下端は，全体にやや丸みを帯びている。鋲は，周縁に４個，中央に２個認められる。金具Ａ３・Ｂ３とも，それぞれ上部の金具Ａ１・Ｂ１よりも明瞭に短い。

コ字形飾金具は，長方形の金具の両端を折り曲げたもの



第2図　遺　物　実　測　図　(Scale=1/2)

で，正面に1個，側面にそれぞれ2個，合計5個の鋲が認められる。

帯金具の鉸具は，吊手飾金具Bに付属する鉸具よりもかなり大型で，方形の金具が付属する。方形の金具には周縁に5個の鋲が認められる。

4. まとめ

胡籙金具の研究は，近年，広範囲にわたる資料の収集と総合的な評価が行われ，着実に研究成果が進展しつつある。なかでも，田中新史・早乙女雅博両氏の意欲的な研究[注2]は，高く評価することができよう。ここでは，以下，田中氏の研究成果を援用しながら，まとめを行いたい。

田中氏は，5～6世紀に使用される胡籙金具を，形態的に分類したのち，Ⅰ～Ⅹ期に編年し，各時期における金具の形態変化とその背景について言及している。

当古墳出土の胡籙金具は，形態・材質とも全く同一のものは出土例がないが，形態的には，BⅠb（1対式中円部造り出し形吊手飾金具）とBⅤ（コ字形飾金具）に分類され，時期的には，吊手飾金具が3枚構成であることと，鉄地金銅張製品であることなどの特徴から，Ⅱ～Ⅲ期に対応するものと考えられる。田中氏の説に準拠すれば，この胡籙金具は，材質に鉄地金銅張という新しい要素をもちつつも，形態的には，3枚構成であり，きわめて高い装飾性を有するものであることから，国内で胡籙の生産を開始した初期段階の製品と考えることが可能であろう。

なお，田中氏の指摘にもあるように，当該時期の胡籙金具を有する古墳が畿内から離れた各地方の有力古墳であることは特に注目すべき問題であり，今後この古墳の被葬者像を考察する上でも重要な点となることを記しておきたい。

（なべた・いさむ＝当センター調査第2課調査第2係調査員）
（いしざき・よしひさ＝京都教育大学学生）

注1　鍋田　勇「私市円山古墳の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第30号　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1988.12

注2　田中新史「古墳出土の胡籙・靫金具」（『弥生・古墳時代資料図録』井上コレクション　言叢社）1988.6
早乙女雅博「古代東アジアの盛矢具」（『東京国立博物館紀要』第23号）1988.3

資　料　紹　介

千代川遺跡出土の木製品

鵜　島　三　寿

今回報告する資料は，昨年度第13次調査出土の遺物１点，今年度第14次調査出土の遺物３点である。この２か年の調査で，第10・11・16・17調査区にわたって幅約30mを測る自然流路跡を検出した。自然流路跡からは，弥生時代末から鎌倉時代までの長きに及ぶ多量の土器とともに，多くの木製品が出土した。(注1) 今年度調査出土の木製品の多くは，今なお整理中であるが，中でも注目すべきものをとりあげ，以下概述する。

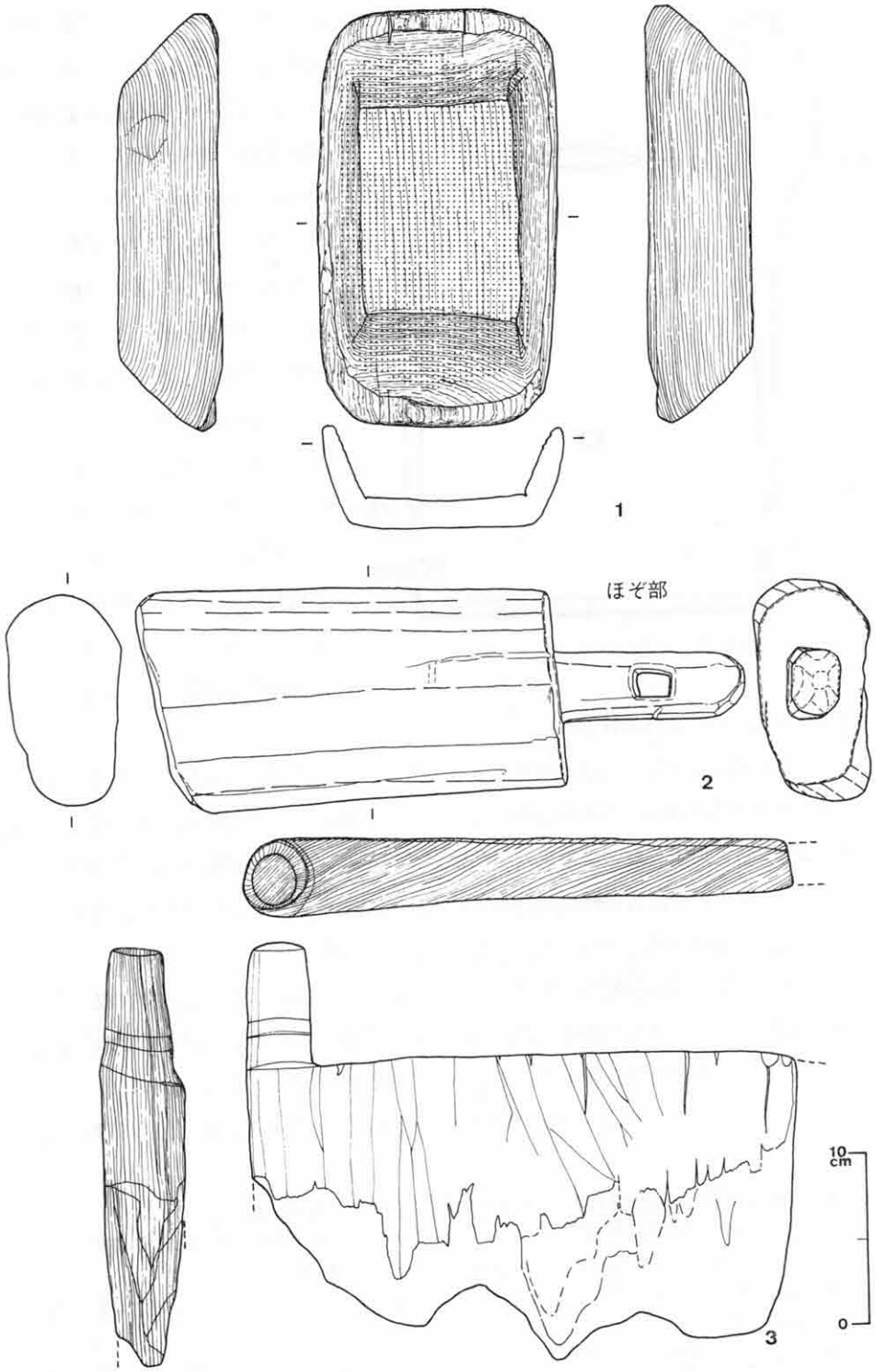
個々について述べる前に，それぞれの時期設定をしておく。

１・２・４は，第11調査区の自然流路跡の灰褐色砂礫中より出土した。この土層中からは，いわゆる布留式土器と６世紀後半の須恵器の２時期の土器が出土した。明確な時期比定はできないが，いずれにしても，この３点の資料は古墳時代の範疇でおさまる。

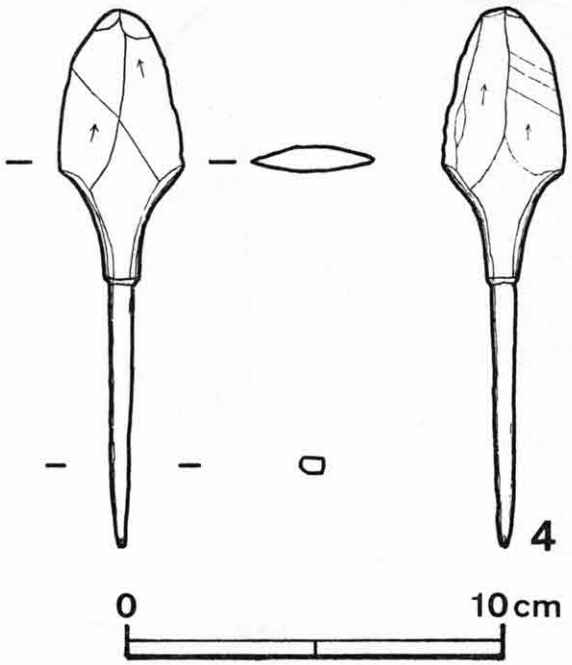
３は，第22調査区で検出した井戸の，井戸枠に転用されていた。この井戸からは，須恵器の杯・蓋など５点，土師器の杯１点，計６点の遺物が出土した。これらの遺物の観察から，８世紀後半という年代を得ることができる。(注2)

１は，平面形が隅丸長方形を呈する槽である。長さ23.7cm・幅13.7cm・底部厚1.7cmを測る。心去りの割材を刳り抜き，ていねいな調整加工で仕上げられている。平坦な底部から斜めに立ち上がる口縁部をもち，端部は面取りが施されている。内面は火を受け，炭化した部分が大半を占める。

２は，槌状木製品である。棒状部は，最大長23.7cm・最大幅12.6cm・最大厚6.5cmを測り，全体的に面取りされ，先端部は斜めに切られ面をもつ。ほぞ部は，長さ11.0cm・幅3.7cm・厚さ3.0cmを測る。ほぞ部も面をもち，先端に至るまでていねいに仕上げられる。ほぞ部の基部より4.4cmのところに，1.9cm×1.4cmの切り込みがなされている。棒状部やほぞ部の切り込みの部分のいずれからも使用痕は看取できない。本例は，類例がなく名称についても多くの問題が残る。また棒状部に使用痕がないことや，主軸線に対し棒状部の先端面が角度をもっていることから，先端面を使用することを目的に作られた可能性も考えられる。あるいは，未製品ということも考慮せねばならず，用途，名称については今後の課題としたい。



第1図　木製品実測図（1）（網目は炭化した部分）



第2図　木製品実測図(2)

3は扉片である。長さ24.1cm・幅31.3cm・厚さは軸部で4.3cm・先端で2.7cm・軸部長7.2cm・直径2.8cmを測る。板材の厚さの違いは，軸部の強度に関係すると思われる。また，軸部の基部から，1.9cmのところに幅0.9cmの回転による磨滅痕が残る。軸先端部に磨滅は認められないことから，扉の上端と考えられる。

井戸枠に転用されていた板材は10片を数えるが，軸を有するものは今回報告の1点のみである。他の板材には，今回の資料とほぼ同じ厚さを測るものもあるが，大半は2cm程度のものである。これが先端の扉の厚さである可能性が高い。

4は鏃形木製品である。広根式の身に茎をつくりだし，実用の鉄鏃を忠実に模している。長さ14.2cm・幅3.2cm・厚さ0.6cmを測る。広根式の鉄鏃は，古墳時代後期に成立するが[注3]，時期的に当資料と矛盾しない。鏃形木製品は，7世紀後半から9世紀前半までの資料が知られており[注4]，その形態は古墳時代の鉄鏃と基本的には変わらない。本来鏃は武器として使用されるが，本例は木製品であるため，祭祀との関係が強いと思われる。

以上，簡単ではあるが木製品4例について述べた。今年度の千代川遺跡第14次調査では，幅約30mを測る大きな自然流路跡を2条発掘調査したが，その中からは多くの木製品が出土した。その多くは今なお整理中であるため，整理が進み次第，順次報告したい。

（うしま・みつひさ＝当センター調査第2課調査第2係調査員）

注1　『亀岡市千代川遺跡第14次』（京埋セ現地説明会資料　No.89-01）

注2　鵜島三寿「昭和62年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第31冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1988

注3　後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」（『人類学雑誌』第54巻第4号，日本考古学選集18 後藤守一集〔下〕）

注4　奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代篇』（奈良国立文化財研究所　史料第27冊）1985

研究ノート

編年作業における弥生土器様式論の諸問題

濱　田　延　充

近年，畿内地域をはじめ，弥生土器様式の細分，あるいは従来の編年の再検討が行われている。筆者も，畿内第Ⅲ・Ⅳ様式の編年の見直しを考えているが，作業を進める中で，基礎的な資料操作におけるいくつかの問題が表面化した。そこで，小林行雄氏以降の弥生土器様式論について整理を行う必要を感じた。

弥生土器様式論の学史的整理については，すでに寺沢薫[注1]・須藤隆[注2]の両氏によってなされている。また，文珠省三氏は，両者の論点の違いを整理している[注3]。ここでは，両氏の論考には直接ふれないが，両氏の様式論は，あまりに観念的であり，実際の資料操作を行う際に，どこまで活用できるか疑問に感じた。

様式論，あるいは型式学も，つまるところは遺物の分類の方法である。それならば，その原点に立ち返ることが，様式の構造の理解を容易にすると考えられる。小論では，そうした観点で弥生土器様式論を構成する「型式」・「形式」・「様式」を設定するにあたっての問題点を指摘し，若干の筆者の見解を述べることとしたい。

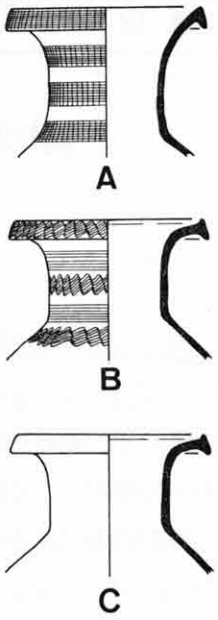
様式設定の手続き

遺跡から出土した土器を分類し，秩序づける，換言すれば様式を設定するには，どのような手続きを行えばよいのであろうか。

小林行雄氏は，様式の検出に「型式の分類」→「様式の算出」の順序で行うことを提示した[注4]。一方，寺沢薫氏は，「形式」→「型式」→「様式」の順序による様式の設定を述べた[注5]。

小林氏は，様式の算出に一括資料の比較(型式群の引算)を用いており，型式の組列を明言していない。「様式標徴はすべての土器形式に平等に現われるというわけではなく，形式によって様式標徴のあらわれ方に濃淡がある。一つ一つの土器形式によって様式のメルクマールとなる型式の内容は異って居り，一つの様式としての型式の振幅にも広狭の差がある。」と述べており，各形式において型式の変化が同時に行われるとはかぎらないことを想定してのことと思われる。

寺沢氏が，形式の設定を最初に行ったのは，これまでの弥生土器様式編年の方法論を踏まえてのことと思われる。編年作業は，上記の小林氏の方法に従って，一括遺物の検討を中心に行われた。一括遺物において分類された型式は，そのまま形式の内容をもつものである。寺沢氏の様式設定の手続きは，一括遺物の検討→型式組列の作成→様式の設定と理解され，小林氏の様式論に型式組列の確立を組み込んだものと評価できる。寺沢氏は形式を細分する形で型式を設定しているが，後述するように，型式・形式の内容から考えると逆の方法で行われるべきであろう。



第1図
壺形土器模式図

型式設定における問題点

型式は，分類の最小単位である。実際の作業としては，土器のもつ様々な属性(形態・文様・調整等)の中から，いくつかがとり出され，それを共有する土器の一群を一つの型式とすることができる。とり出される属性は，作業を行う者によって異なる。よって，作業者が異なると，設定される型式が異なることもありうる。

第1図に，A～Cの3つの壺形土器を示した。ここで，口縁部の形態に着目すると，AとB・Cに分類できる。一方，文様の有無に着目すると，A・BとCに分類できる。

型式分類は，一見，客観的に見えるものでも作業者の主観の入り込む余地が大きいことが理解できる。特に分類が精緻になるほど，型式間の中間的様相をもつ資料の位置付けに主観が大きく入ることとなる。

形式設定における問題

形式は，型式の時間的連続であり，型式の組列として表される。実際の作業では，型式設定の際にとりあげた属性のうち，時間的に変化しているものを取り除いたものを共有する，いくつかの型式の集合として理解される。形式の内容については，小林氏が述べたように(注6)便宜的なものになりがちであるが，編年表を作成したときの整合感は形式設定にかかっており，非常に重要である。

形式の設定の際の問題として，形式の始まりと終わりをどこに置くのかということがあげられる。

広瀬和雄氏が，『亀井』(その2)において提示した編年案では，前期から後期の長期に

わたる形式をいくつか設定している。[注7] 前期1と中期4の壺Aをとり出して，組列を知らない者に同一形式であることを理解させるのは困難である。一方，『弥生式土器集成』「畿内地方」において佐原真氏は，様式ごとに形式の設定を行った。[注8] 屈曲して立ち上がる口縁部をもつ第Ⅲ様式壺Fと，その系譜をひくと考えられるものを第Ⅳ様式壺Gとしている。

寺沢薫氏は，第Ⅴ様式の皿状の杯部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつ高杯を，A～B_4の6形式に分類した。この6つの形式によって組列がくまれており，「A～B_4の各形式はそのまま型式として設定することができる。」としている。[注9]

形式は，単に組列のくめる型式群を一括するだけではなく，さらにその中でいくつかの属性によって分類する工夫も必要であろう。

様式設定における問題点

様式は，時間的・空間的に限定された型式群である。一般的には，一括資料という形で表現される場合が多いが，一括資料＝様式でないことは，すでに多くの先学の述べているとおりである。ここでは，様式のもつ時間の同時性，空間の同一性の認識について検討を加えたい。

異なる形式において，形式間の同時性をいかにして認識すべきか。森本六爾氏が弥生土器において飾られる土器と飾られない土器の存在を認識し，[注10] 小林行雄氏はそうした土器群を編年するために，様式という概念で，一括遺物を中心とした資料操作を行った。[注11] 弥生土器編年における課題は，それ以後，いかに純粋な一括遺物を見つけるかにあった。積極的に型式組列の確立を説いた寺沢薫氏でさえ，共存関係の把握には層位学的方法が必要と述べている。[注12]

では，型式学的な方法で同時性の検証はできないのであろうか。土器のもつ属性の中で，様式内の各形式に共通するものがあれば，それを利用することが可能ではないか。前期における壺と甕に見られる口頸部界の段や，中期の生駒西麓産土器における簾状文の施文原体幅と縦線間隔を，例としてあげておきたい。小林氏が様式を「斉一性の概念」と捉え，[注13] 様式の標徴として文様をとりあげたのは，こうした問題を意識していたものと理解できる。

一方，弥生土器の地域性の研究の進展の中で，様式のもつ地域性が再認識されるようになった。都出比呂志氏は，具体的に畿内地域における中期弥生土器の文様構成の整理を行っている。[注14] こうした議論で問題となってくるのは，地域をいかに設定するかである。佐原真氏が畿内地域の土器の地域性を論じた段階では，[注15] 旧国に近い地域を設定した。これは，土器製作技術を同じくする集団のテリトリーを想定したものと考えられる。横山浩一氏は，様式を「同一技術大系の所産」としている。[注16]

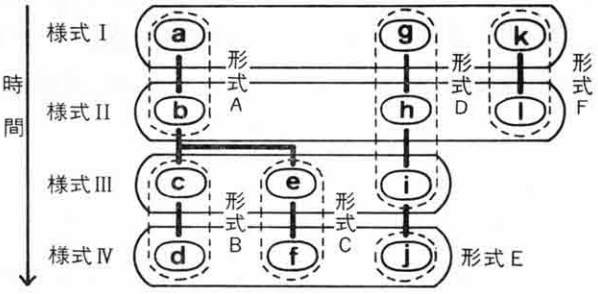
こうした考えとは別に，様式をむしろ同時期に使用された土器群として理解しようとする考え方が存在する。須恵器出現期以降の土師器・須恵器をひとつの様式としてまとめた西弘海氏の考えである。(注17)

弥生土器においても，土器の地域差が明確になるにつれ，遺跡に他地域から運びこまれている土器が存在することが認識されるようになり，この搬入品を様式の中でいかに，とりあつかうかという問題がある。搬入品が，出土遺物全体の中で希少なものの場合は，様式から除かれるべきであるが，一定量以上の割合を占める場合は，とりあつかいが難しい。後者の場合は，遺跡の中での土器の消費活動を考えると無視できないと思われる。様式を同一技術体系の所産と考えれば，搬入品は全て除外される。一方，生活に使用された遺物全部を様式として考えれば，搬入品を様式の中で理解することも可能となろう。

こうした問題は，実は様式のもつ二つの側面にもとづくものなのである。小林行雄氏は様式を論じた際に，遺物から得られる情報として「製作に関するもの」と「使用に関するもの」の二者があることを述べている。(注18) 縄文土器の「型式」概念が，このうち前者を重視したのに対して，弥生土器の「様式」概念は両者を視点に置いている。様式の位置付けは，「型式分類(生産)」と「一括資料(消費)」の間にあると考えられる。そのため「様式」は使用目的によって，使い分ける必要もあるのではないか。

おわりに

小林氏が『弥生式土器聚成図録』・『大和唐古弥生式遺蹟の研究』を発表して，半世紀になろうとしている。近年，小林氏の唐古編年，あるいは佐原氏の畿内編年には，批判的な意見が発表されており，また新たな編年案もいくつか提示されている。しかし，こうした論考も，小論で指摘した問題を理解・対応しているとは言い難い。現在，『弥生式土器集成』以後に出土した大量の弥生土器を総括し，新たな編年をまとめる時期にさしかかっていると言える。筆者の小論が，こうした編年を考える上でのたたき台となればと思って



第2図　様式構造概念図（a～l：型式）

いる。筆者の小林・寺沢両氏の様式論についても理解の至らぬ点があるかも知れない。そうした意味で，先学の御批判・御意見を請う次第である。

（はまだ・のぶみつ＝当センター調査第1課企画係調査員）

注1　寺沢　薫「畿内弥生土器様式発展史素描」（『考古学と古代史』＜同志社大学考古学シリーズ＞）1982
注2　須藤　隆「弥生土器の様式」（『弥生文化の研究』3弥生土器Ⅰ　雄山閣）1986
注3　文珠省三「弥生土器様式論について」（横田先生古稀記念『文化史論集』上）1987
注4　小林行雄「様式」（『弥生式土器聚成図録』）1938
注5　寺沢　薫「大和におけるいわゆる第五様式の細別と二，三の問題」（『奈良市六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所）1980
注6　小林行雄「形式・型式」（『図解・考古学辞典』東京創元社）1959
注7　広瀬和雄「弥生土器の編年と二，三の問題」（『亀井』その2　財団法人大阪文化財センター）1986
注8　佐原　真「畿内地方」（『弥生式土器集成』本編2）1968
注9　注5文献
注10　森本六爾「弥生式土器に於ける二者」（『考古学』5-1）1934
注11　末永雅雄・小林行雄ほか『大和唐古弥生式遺蹟の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告16）1943
注12　注5文献
注13　注4文献
注14　都出比呂志「弥生土器における地域色の性格」（『信濃』35-4）1983
注15　佐原　真「大和川と淀川」（『古代の日本』5近畿　角川書店）1970
注16　横山浩一「型式論」（『講座日本考古学』1研究の方法　岩波書店）1985
注17　西　弘海「土器様式の成立とその背景」（『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集）1982
注18　注4文献

府下遺跡紹介

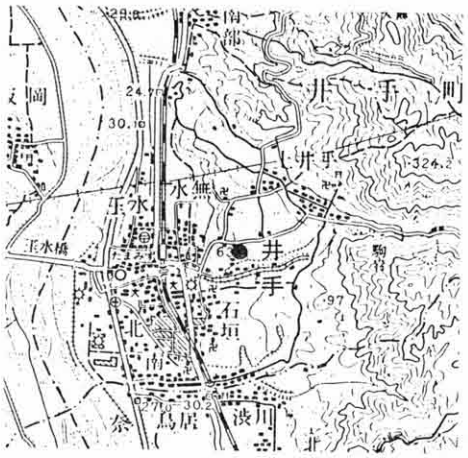
43. 井　手　寺　跡

井手寺跡は，綴喜郡井手町大字井手小字上井手に所在する寺跡で，古くから円提寺跡と称する土壇が存在する。井手寺は，別名円提寺とも言い，いくつかの史料にその名が見える。井手寺跡からは古瓦が出土することで，かなり以前から知られていて，1923年に梅原末治が『歴史と地理』や『京都府史蹟勝地調査會報告』にその概要を報告している。

井手寺は，『伊呂波字類抄』の梅宮神社の項に「符牒男巻下云，太后氏神，祭於圓提寺」とあり，嵯峨天皇の皇后であった橘嘉智子(檀林皇后)の氏神をこの寺で祭ったことがあるとされている。この伝承自体は，あまり信用のできるものではないが，氏神を祭るという伝承が生じるほど橘氏との関係の深い寺であったことは窺うことができる。この寺の建立については，『興福寺官務牒疏』に，

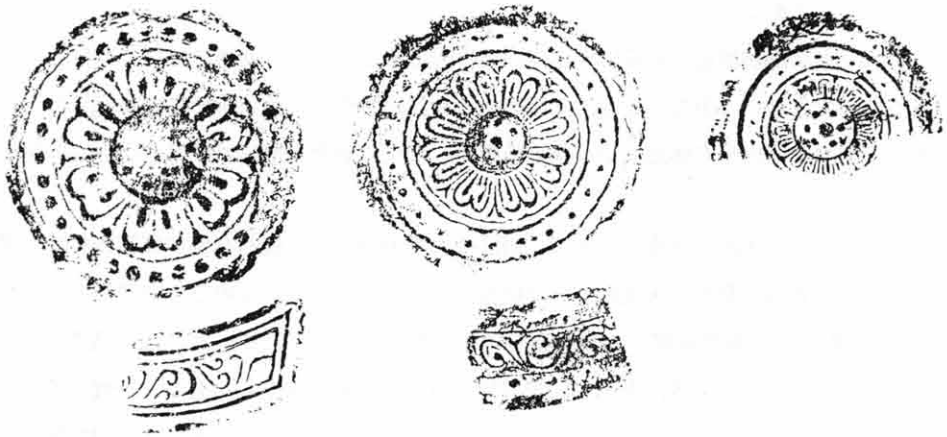
在綴喜郡井堤郷，僧坊八宇，神人四人，推古廿九辛巳年，山背大兄王本願也，本尊千手大士，號觀音寺，左大臣橘諸兄公再建，

とあって，聖徳太子の子どもである山背大兄王が建立したのがはじめであると伝えている。しかし，梅原の報告でもあるように，この寺跡からは7世紀初めの推古朝にまで遡るような瓦は見つかっておらず，この伝承が史実に基づくものでないことが，胡口靖夫によって指摘されている。胡口によれば，井手寺は，橘諸兄の再建ではなく，創建であるという。事実，平安時代も末の文書になるが，永万元(1164)年11月の「山城国梅宮社司等解」に，

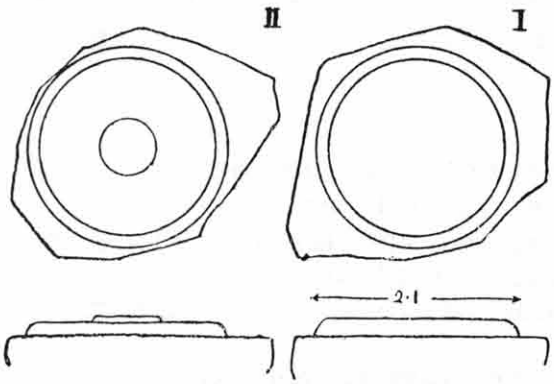


第1図　遺跡所在地（1/50,000）

「圓提寺者爲當社神宮寺，勤社役于今絶之処，……就中圓提寺者爲橘氏草創之道□□，本願起請，以氏僧侶被補別當，爲當社神宮寺，神事無懈怠，所令勤備也(下略)」とあるように，井手寺は橘氏の氏寺として存在したことが明らかである。しかも，梅宮社が橘氏の氏神として平安京の西の郊外に橘嘉智子によって創祀され，『九条年中行事』や『江家次第』などの故実書類にもあるように，外戚神として梅宮祭が公祭化されるようになると，井手寺は梅宮社の神宮寺と



第2図　井手寺跡出土軒瓦拓影



第3図　礎　石（梅原論文より転載）

して位置づけられていったようである。平安時代中期以降，橘氏の勢力が衰え，族長権の一部である氏爵（源平藤橘などの氏族で毎年1月7日に五位に叙せられることをいう）も藤原氏が橘氏是定として行うようになるに及んで，井手寺も堂宇の移建などがなされるなど，しだいに存立の基盤が失われていったようである。事実，先の永万元年の「山城国梅宮社司等解」は，梅宮社司が神宮寺としての井手寺に興福寺が押妨を行ったため，橘氏是定藤原基房に訴えたものであった。

井手寺がその後どのようになったかについては，史料がないため詳しくはわからない。先に示した『興福寺官務牒疏』は，嘉吉元(1441)年の奥書があるので，あるいはそのころには興福寺の末寺になっていた可能性はある。しかし，『興福寺官務牒疏』がどのような目的で編纂された書物かわからないうえ，確実な写本が江戸時代のものしかないといわれている現状では，興福寺の末寺になっていたかどうかの確認は困難である。しかし，永万元年の「梅宮社司等解」に見える興福寺の押妨については，『平安遺文』4813号文書「勘解由次官某書状」に，「橘氏申円提寺事，任先例成遣是定下文之処，南京僧不承引之由，所進解状也」と見えるように，基房の裁定に不満を持った興福寺僧が，さらに解状を提出したことがわかる。この事実からみて，井手寺が興福寺の末寺になっていたことは充分考

えられることである。

このような状況が推定されるにすぎない井手寺であるが，その廃絶についてもほとんど知ることができない。少なくとも，室町時代から江戸時代の初め頃までには廃絶したようであり，すでに『山州名跡志』や『都名所図絵』などの近世の地誌類には井手寺の旧跡を記すにすぎない。

大正年間に梅原末治が調査したとき，旧跡の土壇の周囲から礎石9個が確認された。礎石は，すべて花崗岩製で，火災にあった痕跡がみられたという。このときの調査で，延暦15(796)年鋳造の「隆平永寶」が海獣葡萄鏡とともに出土している。また，奈良時代から平安時代頃の古瓦がたくさん出土し，形式的には恭仁宮跡で出土したものと一致することもあって，奈良時代の創建であることが確実になった。この井手寺の瓦は，平城宮跡や恭仁宮跡で見つかっているものと同じような瓦であるが，この瓦を焼いた瓦窯が玉川南の岡田池のほとりで，山田良三によって数基確認されている。場所的には井手寺から約400mの地にあって，保存状態のよいことが報告されている。　（土橋　誠）

＜参考文献＞

梅原末治「井手寺址」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第4冊　京都府)　1923

梅原末治「山城綴喜郡井手寺の遺跡」(『歴史と地理』11-4)　1923

田中重久「平安奠都前の寺址と其の出土瓦」(『夢殿』第18冊「綜合古瓦研究」第1分冊)　1938

山田良三「京都府綴喜郡井手町の先史遺跡」(『立命館文学』317)　1971

胡口靖夫「橘氏の氏寺について一伝橘諸兄建立の井手寺を中心として一」(『古代文化』223)　1977

森　郁夫「畿内における平城宮系軒瓦の一側面」(『國學院雑誌』78-9)　1977

義江明子「橘氏の成立と氏神の形成」(同『日本古代の氏の構造』吉川弘文館)　1986

長岡京跡調査だより

昭和63年11月24日と12月21日，および平成元年１月25日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は，宮域２件，左京域９件，右京域７件の計18件を数える。これら18件の発掘の調査地等については，位置図および一覧表に示したとおりである。このうち，主なものいくつかをとりあげ，それらの調査成果について，以下簡単に紹介する。

左京第200次（3）

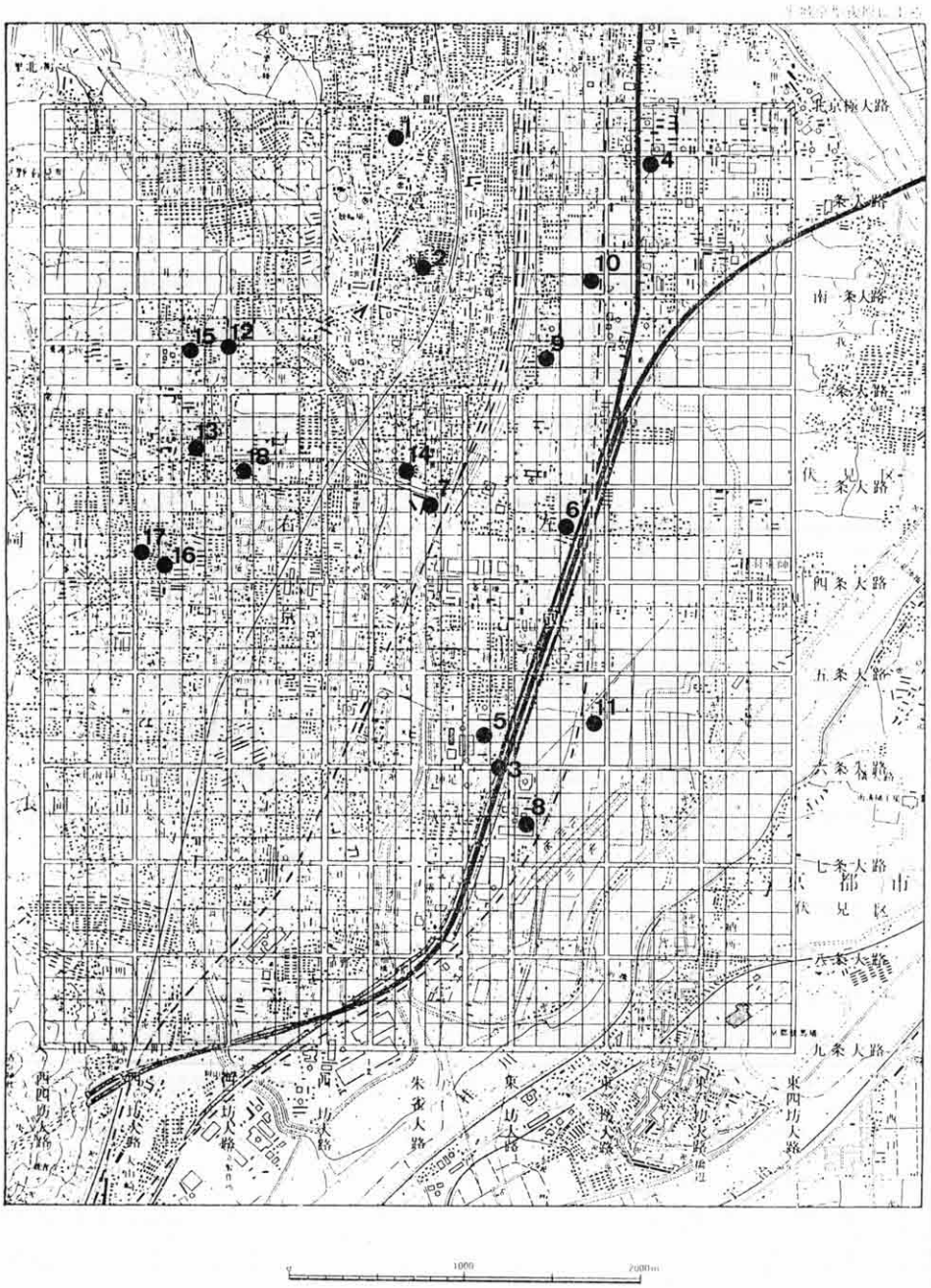
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京域を北東から南西方向に縦断する名神高速道路の拡幅工事に伴う調査である。今年度は，名神高速道路の両側に国道171号線が並走する長岡京市域において，調査を行っている。調査は，名神高速道路と国道171号との間の法面を対象とするものである

調査地一覧表　（平成元年１月末現在）

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第221次	7AN11M	向日市寺戸町殿長1-2, 1-3	(財)向日市埋文	12/20～1/13
2	宮内第222次	7AN13K	向日市鶏冠井町荒内	(財)向日市埋文	1/6～
3	左京第200次	7ANMOT他	長岡京市神足，勝龍寺ほか	(財)京都府埋文	7/11～
4	左京第203次	7ANVMK	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文研	9/1～
5	左京第204次	7ANMYD	長岡京市神足柳田，焼町地内	(財)長岡京市埋文	9/26～
6	左京第205次	7ANFKI-4	向日市上植野町北淀井３	(財)向日市埋文	11/28～11/30
7	左京第206次	7ANFDK-4	向日市上植野町堂ノ前	(財)向日市埋文	12/5～
8	左京第207次	7ANMAR-2	長岡京市神足芦原16-1	(財)長岡京市埋文	12/6～
9	左京第208次	7ANESH-7	向日市鶏冠井町沢ノ東14	(財)向日市埋文	1/6～
10	左京第209次	7ANEJK	向日市鶏冠井町上古	(財)向日市埋文	1/11～
11	左京第210次	7ANMOB	長岡京市神足落述15-1	(財)長岡京市埋文	1/17～
12	右京第310次	7ANIFC	長岡京市今里更ノ町ほか	(財)京都府埋文	7/5～
13	右京第318次	7ANIHR	長岡京市今里三丁目114-2	長岡京市教委	10/27～11/26
14	右京第319次	7ANFZG-5	向日市上植野町地後13	(財)向日市埋文	10/24～12/3
15	右京第320次	7ANGMT-2	長岡京市井ノ内南内畑28-29他	(財)長岡京市埋文	11/7～11/22
16	右京第321次	7ANIVS-2	長岡京市天神五丁目6-3	(財)長岡京市埋文	11/9～12/19
17	右京第322次	7ANIOK-2	長岡京市天神五丁目115-1, 2	(財)長岡京市埋文	11/28～
18	右京第323次	7ANIFD-6	長岡京市野添二丁目106-1	(財)長岡京市埋文	1/6～

長岡京条坊復原図



数字は本文（　）内と対応

が，安全対策その他の関係上，条坊遺構の検出に重点を置いて現在鋭意進行中である。検出遺構としては，六条大路の南側溝と推定される東西溝のほか，条里地割の中を斜行する古道である久我畷に関連するとみられる石敷遺構などがある。

左京第203次（4）

（財）京都市埋蔵文化財研究所

これまで，長岡京内で755回もの発掘調査が行われているが，その中でも，この調査は長岡京研究の歴史に残る屈指の調査成果が得られた発掘といえよう。

調査地は，国道171号線東土川交差点から北へ約200m行った地点で，長岡京跡の左京一条三坊六・十一町にあたるとともに，戊亥遺跡の範囲内にも含まれている。

長岡京関係の遺構には，北西から南東に向かって流れる幅15m以上の旧河道の南西岸で検出された南北３間以上，東西１間の掘立柱建物跡１棟と東西方向の柵列１条とがある。この旧河道内から200点を越える木簡のほか，木製品，土器，瓦などが出土し，注目を集めている。木簡は，旧河道の南西岸近くの３か所から集中的に検出されており，その出土状況は，川岸から木製品，木簡の削り屑，種子，土器，瓦などとともに一括投棄された状況を示していた。木簡のうち，現在までに判読されているものに，「督曹司」「近衛府」「兵衛府」「太政官」「□務省」「酒人内親王」「神王」「藤原岡継」「守山王」「石川家守」「紀朝臣」「板茂千依」「卜部清成」「矢作広千麻呂」「乙成女」「御薪」「榑」「長押」などがある。

遺跡の性格については，長岡京の造営にあたっての，木材を始めとする諸物資の陸揚げ基地ではないかと見られている。このほか，弥生後期から古墳前期にかけての隅丸方形住居跡２基，溝，柱穴など戊亥遺跡に関する遺構・遺物も伴出している。

右京第310次（12）

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

外環状線建設に伴う昭和63年度分の調査である。調査地は，長岡京跡の右京二条二坊十四・十五町，および西二坊大路の路面に該当している。西二坊大路の側溝については，過去の調査で東西両側溝ともに確認されているが，今回も東側溝の北への延長部を80m余りにわたって確認することができた。このほか，西二坊大

路の路面を横切る二条条間大路の南側溝などが検出されている。なお，二条条間大路と西二坊大路との交差点付近は，北西から南西方向に流れる流路に相当しており，長岡京造営時にこれを埋め立て，さらに軟弱なか所については，自然木を枕木状に並べ，その上にバラス敷を施して路面とした，路盤工事の跡が確認されている。下層からは，奈良時代の井戸跡，轍群，古墳時代の溝，竪穴式住居跡，柱穴，土坑，自然流路などが見いだされている。井戸跡は，長岡京の大路が交わる十字路の中央部近くの位置で検出された，石敷きの雨落ち溝を伴う井籠組み井戸で，官衙に伴うものと考えられる。古墳時代の溝は，竪穴式住居跡群の北側を弧状にめぐるもので，今里遺跡の古墳時代集落の北限が当調査区内までのびることが明らかとなった。

遺物のうちの多くは自然流路の埋土の中から採取されたもので，土師器，須恵器，木簡などがある。木簡のうち1点は，「御司召」から始まるもので，流人の移送に要する人員4名を召喚した召喚状と思われる文書様木簡である。井戸，掘立柱建物，墨書土器「園司」などの遺構・遺物の存在から，園司に関係するものではないかと推察されている。

右京第318次（13）　長岡京市教育委員会

調査地は，長岡京跡の右京三条三坊六町にあたるとともに，乙訓寺，今里遺跡の範囲内にも該当している。検出遺構には，中世の溝，土坑，柱穴などがあり，瓦，土師器，須恵器(円面硯)，陶器などの各時代の遺物を伴う。注目されるのは，これらの遺物に混じって碧玉製車輪石の断片1点が発見されたことである。現在地上にその姿をとどめない前期古墳に伴うものか，もともと集落遺跡に伴うものか，今後の調査・研究の進展に期待される。

右京第321次（16）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は，長岡京の右京四条三坊にあたるが，調査の結果現地表に痕跡をとどめない方墳2基(宇津久志古墳群)が新たに発見された。墳丘は一辺8mの小規模なもので，周囲には幅のせまい周溝がめぐる。1号墳の中央部には，木棺直葬の主体部が遺存しており，鉄刀・竪櫛・勾玉・ガラス玉などの副葬品が見いだされた。

周溝内からも，初期須恵器，滑石製紡錘車，滑石製臼玉，管玉などが出土している。調査地は今里大塚古墳の東南約500mの台地上に相当しており，古墳中期を中心とする低墳丘の群集墳の新例として，今後の周辺での調査の進展に期待が寄せられる。

右京第322次（17）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は，長岡京右京四条三坊にあたるとともに，今里大塚古墳の周濠部にも相当する。墳丘の西北側の水田部を対象に調査が行われた結果，浅く掘りこまれた周濠と，陸橋状をなす高まりが検出され，従来円墳といわれていた今里大塚の西側に前方部または陸橋部が付設されている公算が強くなった。

（奥村清一郎）

センターの動向（63. 11～元. 1）

1. できごと

11. 10・11　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(東京)出席(荒木事務局長・田中総務課長)

11. 11　長岡宮大極殿祭(向日市)出席(中谷次長・杉原調査第2課長)

11. 15　両丹文化財保護連絡協議会(宮津市)出席(中谷次長)

11. 18　堤谷古墳群(久美浜町)発掘調査関係者説明会実施

　全国埋蔵文化財法人連絡協議会・コンピュータ等導入研究委員会(泉大津市)出席(奥村企画兼資料係長・土橋調査員)

11. 21　全国埋蔵文化財法人連絡協議会・近畿ブロック会議(京都市)出席(荒木事務局長・杉原調査第2課長・杉江主事)

11. 24　長岡京連絡協議会開催

　京都府議会文教常任委員会，私市円山古墳(綾部市)視察

　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター来所

11. 29　桑飼上遺跡(舞鶴市)発掘調査現地説明会実施

11. 30　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財技術者専門研修「古墳時代遺跡調査課程」参加(細川康晴調査員，～12. 20)

12. 6　第23回役員会・理事会開催―於・平安会館―福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，荒木昭太郎常務理事，中沢圭二・佐原真・藤田价浩・上田将・堤圭三郎の各理事，堂端明雄・奥村幸一の両監事出席

　財団法人栃木県文化振興事業団来所

12. 7　有光教一京都府文化財保護審議会会長，私市円山古墳視察

12. 9　日光寺遺跡(久美浜町)発掘調査現地説明会実施

12. 10　第49回研修会開催―別掲―

　樋口隆康副理事長，上人ケ平遺跡視察

12. 13　足利健亮理事，私市円山古墳・桑飼上遺跡・千代川遺跡(亀岡市)視察

12. 15　遠所古墳群(弥栄町)発掘調査現地説明会実施

12. 21　長岡京連絡協議会開催

12. 28　仕事納め

64. 1. 4　仕事始め

元. 1. 18　太宰府市教育委員会来所

1. 25　長岡京連絡協議会開催

　三宅遺跡(綾部市)発掘調査関係者説明会実施

1. 27・28　全国埋蔵文化財法人連絡協議会・近畿ブロック会議出席(荒木事務局長・杉原調査第2課長)

1. 28　千代川遺跡発掘調査現地説明会実施，川上　貢理事，千代川遺跡視察

1. 30　調査成果交流会打ち合わせ会出席(奥村企画兼資料係長)

2. 普及啓発事業

12. 10　第49回研修会開催一於・京都社会福祉会館：京都府下における最近の発掘調査一森　正「野田川町休場古墳の調査」，樋口隆久「亀岡市医王谷古墳群の調査」，伊野近富「京都市平安京跡(府庁舎)の調査」，永田信一「京都市平安宮豊楽院正殿跡の調査」

受贈図書一覧(63. 10. 16～元. 1. 31)

苫小牧市埋蔵文化財調査センター	とまこまい埋文だより No. 15
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No. 42
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書 第186～194・196集
(財)栃木県文化振興事業団	栃木県埋蔵文化財調査報告 第86・95～96集，栃木県文化振興事業団年報 昭和62年度
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団創立十周年記念論集　群馬の考古学，上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告 第9集，後田遺跡Ⅱ
(財)東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅵ，資料目録2，多摩ニュータウン遺跡 昭和61年度，多摩ニュータウン No. 57 遺跡一遺跡の概要と整備のあらまし一
富山県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第24号
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター年報2 昭和61年度
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第21集
三重県斎宮跡調査事務所	三重県斎宮跡調査事務所年報 1987 史跡斎宮跡一発掘調査概報一
(財)滋賀県文化財保護協会	文化財教室シリーズ〔98〕～〔100〕，滋賀文化財だより No. 129～132，滋賀県文化財目録 昭和63年度追録，湖岸堤管理用道路志那北その2工区建設に伴う志那湖底遺跡試掘調査報告書，県道西明寺水口線道路改良第一種工事に伴う蓮台遺跡発掘調査報告書，宇曽川災害復旧助成事業に伴う肥田城遺跡発掘調査報告書，県立守山高校屋内運動場増築に伴う金ケ森東遺跡発掘調査報告書，横尾山古墳群発掘調査報告書，北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅹ，県道片岡栗東線特殊改良第一種工事に伴う芦浦遺跡発掘調査報告書Ⅱ，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ－2，同Ⅳ－1～2，県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ，草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報3，近江国庁周辺遺跡調査概要Ⅰ

滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第104～105号
(財)大阪文化財センター	第6回近畿地方埋蔵文化財研究会資料
(財)大阪市文化財協会	葦火 16～17号
高槻市立埋蔵文化財調査センター	昭和59・60年度 高槻市文化財年報
(財)東大阪市文化財協会	神並遺跡Ⅲ
(財)枚方市文化財研究調査会	10年のあゆみ，図録 枚方の遺跡
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告 15
(財)元興寺文化財研究所	元興寺文化財研究 No. 30
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 182～185
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報 第7号
栃木県教育委員会	第2回企画展　前方後円墳の時代―しもつけにおけるその出現と展開―
市原市教育委員会	「王賜」銘鉄剣概報　千葉県市原市稲荷台1号墳出土
府中市教育委員会	府中市埋蔵文化財調査報告 第8・10集
福野町教育委員会	寺家新屋敷館跡
河内村教育委員会	福岡遺跡
敦賀市教育委員会	敦賀市埋蔵文化財調査報告　第1集
磐田市教育委員会	一の谷中世墳墓群
度会町教育委員会	度会町文化財調査報告 4
大津市教育委員会	大津市埋蔵文化財調査報告書 13
愛東町教育委員会	愛東町文化財調査報告 第2集
安曇川町教育委員会	町内遺跡分布調査報告書
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告 13
五個荘町教育委員会	五個荘町文化財調査報告 13～14
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書 第8～11集
米原町教育委員会	米原町埋蔵文化財調査報告 Ⅸ，同　Ⅹ
野洲町教育委員会	昭和60年度 野洲町埋蔵文化財調査年報，昭和60年度 野洲町遺跡群発掘調査概要，昭和61年度 野洲町内遺跡発掘調査概要，昭和62年度 野洲町内遺跡発掘調査概要，上永原遺跡発掘調査概要Ⅰ，大篠原西遺跡発掘調査報告，街道遺跡発掘調査報告 Ⅰ，安城寺遺跡 Ⅰ～Ⅲ
柏原市教育委員会	東洋古陶磁展　海のシルクロードからの贈り物
泉南市教育委員会	蘇る海会寺
寝屋川市教育委員会	高宮八丁遺跡―石器編―

羽曳野市教育委員会	河内飛鳥を彩る渡来文化
枚方市教育委員会	枚方市文化財調査報告 第20集
大阪狭山市	大阪狭山市史要
松原市教育委員会	松原市遺跡発掘調査概要 昭和62年度
兵庫県教育委員会	兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度，兵庫県文化財調査報告書 第37～50冊
神戸市教育委員会	昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報，昭和62年度 遺跡現地説明会資料，地下に眠る神戸の歴史展 Ⅵ
川西市教育委員会	川西文化財ウォーキング
姫路市教育委員会	姫路の文化財 第1巻―指定文化財―
橿原市教育委員会	埋蔵文化財調査集報 昭和60年度，橿原市埋蔵文化財調査概報 5
香芝町教育委員会	香芝町埋蔵文化財展
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財発掘調査報告 6
徳島県教育委員会	内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和63年度
大野城市教育委員会	大野城市の文化財 第19～20集，大野城市文化財調査報告書 第23～26集
久留米市教育委員会	筑後国府跡，東部土地区画整地事業関係埋蔵文化財調査報告書 第7集
太宰府市教育委員会	篠振遺跡―太宰府市の文化財 第1集―，太宰府天満宮境内地発掘調査報告書 第1集
宗像市教育委員会	宗像市文化財調査報告書 第19集
千歳村教育委員会	高添遺跡―出口地区―大分県大野郡千歳村高添地区所在遺跡の調査報告書―
宮崎県教育委員会	宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第4集
大船渡市立博物館	気仙の民俗芸能
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第13号
秋田県立博物館	博物館ニュース No. 72～73
栃木県立博物館	研究紀要 第5号
栃木県立しもつけ風土記の丘資料館	常設展示解説 古代下野国の歴史
国立歴史民俗博物館	歴博 31～32
千葉市立加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第15号
君津市立久留里城址資料館	君津市立久留里城址資料館年報 9（昭和62年度）
下総史料館	かみしき 30
東京国立博物館	特別展 日本の考古学―その歩みと成果―

大田区立郷土博物館	大田区立郷土博物館だより 第19号，特別展 鷹狩り―歴史と美術―
世田谷区立郷土資料館	資料館だより No. 9
東京都目黒区守屋教育会館郷土資料室	カシムがやってきた―縄文人のくらし―
出光美術館	出光美術館館報 第62号
茅ケ崎市文化資料館	資料館だより No. 66～67
石川県立歴史博物館	石川れきはく 第9号
小松市立博物館	小松市立博物館だより No. 3
福井県立博物館	ふくいミュージアム No. 14
福井県立朝倉氏遺跡資料館	特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 Ⅱ，一乗谷朝倉氏遺跡朝倉館前連絡道路敷設に伴う発掘調査報告
三方町立郷土資料館	特別展 続，ふるさとのあけぼの展
浜松市博物館	浜松市博物館だより No. 24
沼津市歴史民俗資料館	資料館だより 82
愛知県陶磁資料館	愛知県陶磁資料館所蔵品図録，特別展「日本陶磁絵巻」図録
常滑市民俗資料館	図録 末法の造形・三筋壺展
一宮市博物館	一宮市博物館だより No. 4
三重県立博物館	三重県立博物館資料目録 Ⅰ～Ⅲ
滋賀県立近江風土記の丘資料館	近江出土の施釉陶器，謎の湖底遺跡を探る―琵琶湖1万年の変貌―
高島町歴史民俗資料館	高島の民俗 61号
兵庫県立歴史博物館	わたりやぐら 第9・10合併号
神戸市立博物館	博物館だより No. 26
春日町歴史民俗資料館	丹波のあけぼの展 古代のまつり
鳥取県立博物館	郷土と博物館 67号
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No. 92，古代の女性～女神たちからのメッセージ～
倉敷考古館	倉敷考古館研究集報 第20号
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 32
佐賀県立九州陶磁文化館	セラミック九州 No. 18，九州陶磁文化館年報 昭和62年度
長崎県立美術博物館	長崎県立美術博物館だより No. 99～100
宮崎県総合博物館	埋蔵文化財調査研究報告 Ⅱ
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学論集―歴史学・地理学―第20号，紀要 第20号
東京大学総合研究資料館	東京大学総合研究資料館ニュース 15号
日本大学史学会	史叢 第41号
立正大学文学部考古学研究室	考古学研究室彙報 第24号，江戸・仙台坂遺跡（Ⅰ）
早稲田大学考古学会	古代 第86号

大手前女子大学	大手前女子大学論集 第22号
奈良大学文学部文化財学科	文化財学報 第5集
天理大学附属天理参考館	天理参考館報 創刊号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡調査研究年報 5
山口大学人文学部考古学研究室	山口大学人文学部考古学研究室研究報告 第5集
熊本大学文学部考古学研究室	石原遺跡 研究室活動報告 22
鹿児島大学考古学会	鹿児島大学考古学会会報 第10号，人類史研究 第7号
東京都中野区新井三丁目遺跡調査会	新井三丁目遺跡発掘調査報告書
葛西城址調査会	葛西城址 葛飾区青戸7丁目36番地点発掘調査報告書
㈱講談社	古代史復元 3 縄文人の道具
㈱名著出版	歴史手帖 第181～184号
玉川文化財研究所	神奈川県大和市 台山遺跡発掘調査報告書
(財)山梨文化財研究所	山梨文化財研究所報 第6号
(財)古代學協會	古代文化 第358～360号
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第26～27号
律令祭祀研究会	律令期祭祀遺物集成
木簡学会	木簡研究 第10号
朝鮮学会	朝鮮学報 第128輯
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 第28号
(財)京都市埋蔵文化財研究所	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度，大薮遺跡発掘調査概報 昭和62年度，下鳥羽遺跡発掘調査概報 昭和62年度，鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和62年度，中臣遺跡発掘調査概報 昭和62年度，平安京跡発掘調査概報 昭和62年度
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第3集
京都府教育委員会	京都府指定・登録文化財等目録(付録 市町村指定文化財目録)
京都市文化観光局文化財保護課	京都市文化財だより 第10号
宮津市教育委員会	特別展 城の考古学―京都府北部中・近世城郭出土の遺跡と遺物―
峰山町教育委員会	京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書 第12集
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第21冊
宇治市教育委員会	市民考古学講座
京都府立総合資料館	総合資料館だより No. 78
京都府立丹後郷土資料館	丹後国一宮 籠神社の秘宝(特別陳列図録 23)，丹後の紡織習俗調査報告書
亀岡市文化資料館	第3回企画展 発掘調査から学ぶ，第4回特別展 円山応挙

泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第五巻，茶道具
同志社大学考古学資料室	同志社大学考古学シリーズ Ⅳ 考古学と技術
(財)京都古文化保存協会	会報 第65号
口丹波史談会	丹波史談 127号
乾　美　栄　子	第１回市町村埋蔵文化財展 古代の大和―市町村の発掘成果から―
井　上　正　暉	史談ふくち山 430～436
大　塚　初　重	古河市史 通史編
寒　川　　旭	日本文化財科学会会報 第16号
関　口　功　一	古代東国の王者―三ツ寺居館とその時代―，関越道上越線発掘調査の成果から―多胡郡がつくられたところ―
松　井　忠　春	図説 韓国の歴史
百　田　昌　夫	山口県文化財 第18号

―編集後記―

いよいよ春めいてまいりましたが，情報31号が完成しましたのでお届けします。

本号では，当センター調査の成果報告だけでなく，韓国の義昌・茶戸里遺跡の調査成果を掲載させていただきました。貴重な写真の掲載を快諾いただいた李健茂先生にはこの場をかりて厚く御礼申し上げます。

なお，本号では，職員個々の日頃の研究の一端を公表したものも掲載いたしましたので，併せて御味読下さい。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第31号

平成元年3月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
℡（075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
℡（075)441-3155（代）